
永田町ゲーム

佐乃海テル

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

永田町ゲーム

【Nコード】

N9007A

【作者名】

佐乃海テル

【あらすじ】

それは6月のある日永田町で起きた大人同士の長い長いゲーム。大人同士は2つのチームに別れていて、お互いのチームの中には味方しかいないはず。なのに本当に味方になってくれる人は閣議室からひとり、またひとり減っていく。そのゲームは本当の信頼という一つだけが生き残れる条件だった。

- 1 - 人物紹介

人物が分からなくなったら、ここを見てください。人物が増えた場合は増やします。

基本的には小説の中で説明はします。

民政党・民主連合関係者

内閣総理大臣

小峰幸三 63歳

民政党総裁、王京大学卒、黒篠派。末崎を最重要視する首相。小峰内閣を発足させてから2年が経つが、これと言った改革も逆に失敗も無かった。そこで国民への形としてのアピールをしようと内閣改造を掲げる。

内閣官房長官

末崎誠一郎 55歳

黒篠派の古参でポスト小峰候補の筆頭。王京大学卒。

総務大臣

菊名芳郎 47歳

墨田政治大学卒業。キャリア組でなく地道に出世した大臣として注目を集める。

法務大臣

那流茂久 67歳

東京大学卒、風波派。キャリア組の代表だがあまり国民からの人

気が無い。本人は次期首相の座を狙っている。同じ政党ではあるが、あまり首相とは仲が良くないと言われている。

外務大臣

風波涼子 かぜなみりょうこ 44歳

東京大学卒。キャリア組代表の中でも力が強く、風波派会長。派閥は違うが力は強いので、首相から外務大臣に任命された。風波自身は首相とそれなりに仲良くやろうとしているが、風波派の人間は敵対感をつのらせている。

財務大臣

嘉条蓮 かじょうれん 38歳

東京大学卒、民主連合政調会長も務める。まだ政治界では力を持つていないが、若いのでこれからの政治界での活躍を民主連合の人間に見込まれている。

厚生労働教育大臣

黒篠健也 くろしのけんや 68歳

王京大学卒。元首相で民政党の相談役の一人。大臣としての職を果たすかたわら、これからの政治を真面目に考える人間。力は持っているが、本人は汚いことがあまり好きでないので実権を持つとうとはしない、とされているが実態は不明。

経済産業大臣

早川哲 はやかわてつ 51歳

澄川大学卒。黒篠派の古参。黒篠政権の時から経済産業大臣を務めるできる人間。末崎と並んでポスト小峰の候補。農林水産省との統合を決定したのも早川である。しかしいまひとつ意見を表に出さない人間である。

国土交通大臣

ながしまりえ
長島理恵 56歳

王京大学卒。民主連合副代表。基本的には小峰に賛成している。国土交通大臣としては高速道路を延長させた結果、各地での騒音公害の反響が大きく対応に手をもてあましている。

国家治安維持委員会委員長

からやましん
唐山新 72歳

防衛庁と国家公安委員会の合併により出来た委員会の長を務める。場合によっては強い武力を持った人間となるため、慎重に選ばれた人間である。欲も無く、常に仕事をきちんと果たそうとする。国会議員ではない無所属。

民政党幹事長

いそえいた
磯江栄太 49歳

民政党幹事長・風波派。風波が死んだことを知って、小峰に全面協力する。

原理想関係者

原理想代表

味内閣内閣総理大臣

あしみきお
味幹夫 56歳

過激な思想を持ち、民政党・小峰政治を激しく批判する原理想代表。しかし政治への思いが熱いことは確かで先日の衆議院総選挙で民政党・民主連合の2分の1、全体の3分の1の議席を獲得することに成功する。小峰内閣の改造にあたってクーデターを起こす。

原理党選挙対策委員会委員長

味内閣国家治安維持委員会委員長

尾崎公太 おなざきこうた 47歳

選挙対策委員会を味とともに指揮し、クーデターの際に国家治安維持委員会委員長という大きな職を手に入れる。原理党の重要ポストにいる彼には以前民政党との大きな出来事があった。

原理党党員

民主連合名義衆議院議員

車田憲明 くるまだのりあき 38歳

民主連合の新人議員。小峰内閣改造反対クーデター第一実行本部部長・放送・閣議室監視係。

黒篠・早川と裏でつながっており、黒篠には頭が上がりないはずだが、彼への恩は形だけのものだった。

その他

改憲党代表

綾葉豊一 あやはとよいち 56歳

第2野党改憲党の代表。普段小峰・末崎の政策に反対を掲げる人間の一人だが、政治の本当の意味を理解している。そのため小峰・末崎とは表面上の仲の悪さとは裏腹に、深い信頼が築かれている。

自衛隊統合幕僚長

秋口貞夫 あきぐちさだお 58歳

自衛隊に古くから勤めている、海上自衛隊出身の統合幕僚長。2年ほど前に海上幕僚長から昇格した。政治に対してはあまり関心を持っていないが、基本的には民政党の政治に不満を持っていないかつ

永田町ゲーム

たため、味の自衛隊の使い方やこのクーデターに対してあまり良くは思っていない。

- 1 : 人物紹介 (後書き)

なるべく早く連載が進むように頑張りますので、見守っていただけるとありがたいです。

る。

「それにしても末崎さんは早いですね。さすが小峰首相の側近、ソツが無いのですね」

「そんな言い方やめてください」

末崎は本当に小峰を心から尊敬している。この二人の信頼関係は本当に強いのだが、テレビなどで取り上げられるとまるで汚い仲のように思われてしまう。末崎はそれが悲しくてならなかった。そして長島のような言い方も心から嫌っていた。

「末崎さんはよろしいじゃないの、出世することはあってもクビになることはないわ。でも我々民主連合はあくまで政治グループ。連立政権は形だけ、だからいつこの閣議室に入れなくなってもおかしくないの。今日の閣議は真剣問題なんです」

「そうですか、でもそのような言い方はよして下さい。大変心が痛みます」

「ふん」

長島は不機嫌そうに反応して、席に座った。

その頃総裁室で人事決りを慎重に進めていた小峰の元に秘書が来た。

「首相、このような怪文書が」

秘書から手渡されたのは一枚の、紙。そこには新聞の文字の切り抜きで

『内閣改造ヲヤメテ、総辞職ヲシロ。従ワナイノナラバ我々ガ内閣改造ヲ行ウ』

と書かれていた。

「またか」

最近では総裁室にこのような原理党員の過激派からの脅迫文書とみられるものが、よく来るようになった。これもその一つだろう。小峰はよりによって忙しいときに、とつまらなそうに言った後、秘書

に処分を命じた。

この予告はそんなに規模の小さいものではなかった。

13:00。小峰が閣議室に入った。今日の閣議は人事の話が出るということで皆小峰より先に来ていた。内閣改造ということはこの閣議を知らん顔している人間が明日は大臣になっているかもしれないのだ。皆不安・疑心の念で閣議に臨んだ。小峰はそこに配慮をして詳しい人事は言わなかった。

「とりあえず、内閣改造の人事についてお話します。引継ぎについてですが……」

野党第一党である原理党の本部、時は12時50分。原理党の議員の男がテレビを見ていた。彼は尾崎といった。テレビはニュースに変わる。ニュースの内容は尾崎にもある程度見当が付いていた。昨日の選挙の結果だろう。ところが予想は外れた。

「今日、小峰首相は臨時閣議を開きました。この閣議は近く行われる内閣改造に先立って行われているものだと言われています。閣議は1時から始まり、3時ごろに終わる予定とのことです。国会議事堂と中継がつながっています。山田さん！」

小峰内閣が改造に踏み切る……もう今日早速来るとは思わなかったが全くの予想外ではなかった。むしろこれから起こることこそが尾崎にとって予想外の出来事となる。

「尾崎」

原理党の幹部から呼ばれた。本部の臨時会議だそうだ。残ったコーヒーを一気に飲んで、会議室に入った。

閣議は小峰が淡々と引継ぎの手順を言うだけで、他の者は黙って

いた。そして全員が待つていたことが言い渡される。

「新人事の発表、発効ですが」

皆の目が自分に向いていることを小峰は確認した。

「明日です」

これまた急だったが、窮屈な日々を長く強いられるよりかはマシだろう。皆明日の予告を待つ。小峰は時計を見た。2時55分、いい時間だ。終了予定の3時にも近いのでこれで会議は終結するはずだった。

はずだった。

国会議事堂にアナウンスが流れた。皆が何事かと騒ぐ。そしてそれは告げられた。

「小峰内閣の諸君、貴様らは私達原理党の命令を無視して改造を進めることを選択した。君達のこの決定は原理党による内閣改造を選んだことになる」

何を馬鹿な、といった顔を全員がした。野党が政治の実権を持つ与党に歯向かうのは全体的に不可能だと思っただし、ただのくだらん反乱であろうと思っただい。

「原理党の内閣改造は、ズバリ民政党の排除である。よって内閣改造の際に必要な無い人材は消す」

閣僚たちはざわつき始めた。何やら話が冗談の域を超えたことを皆感じたからである。

「今から我々は国会議事堂および政府関係の施設・設備を占拠していく。お前らは閣議室にいろ。出たら死ぬと思え。そして喉が渇いたり腹が減って死んだほうがマシだと思っただけに出て来い。諸君の健闘を……心から祈っているよ」

笑いを含んだその声は本気そのものだった。

「大変なことになりましたな、これは」

そう言ったのは、厚生労働教育大臣・黒篠健也である。2代前の首相で、政治というものを真剣に考えている人間だ。そして黒篠派という民政党最大の派閥を築き上げた人間でもある。

「とりあえず」

小峰は言った。安全を第一にするため、命令通りここを出ないように呼びかけた。そして、テレビを付ける。

閣僚は全員驚いた。いつのまにかどのテレビ局も原理党クーデターを報じていた。そして、衝撃の報道が入ってきた。

「ただいま情報が入りました。えー、国家治安維持委員会本部が原理党過激派により占拠された模様です」

「何ですと！」

声を上げたのは国家治安維持委員会委員長・唐山新である。唐山は小峰内閣の最長老。そして重要な役職を持つ人間の一人なのだ。

「警察がおさえられたか」

末崎は考え込む姿勢になった。確かに警察からおさえる手はなかなかよく考えたものである。だが、感心している場合でもない。末崎は言った。

「唐山さん、自衛軍の出勤を要請してください」

皆の顔に希望が灯った。唐山はその手があった、と言って電話をかけ始めた。

「……あれ」

唐山は首をかしげた。

「どうしたんです」

末崎を始めとする閣僚全員が不安の予感をつのらせる。

「電話がつかないんじゃないじゃよ」

「安心しろ。外との連絡網は完全に閉ざしてある。これは俺らだけのゲームなんだ。助っ人を呼ぶのはずるくないかな？」

そのアナウンスに皆苛立ちを感じるが、誰も反抗は出来ない。

小峰はもう一度今の内閣の閣僚を見回した。

現在の内閣の構成人数は10人。昔はもっと多かったが、省庁合併が進んだ結果こうなった。

まず総務大臣の菊名芳郎きくなよしろう。彼は47歳という若手でありながらも、人柄でここまで上ってきた強い人間である。能力もあり、これから見込んで小峰は彼を内閣に入れた。彼は墨田政治大学で地道に政治を学んできた人間で、キャリア組ではないが国民の支持は普通の大臣よりも大きいと思われる。彼とはお互いそれなりに交流がある。

その右でじっとしている女性に小峰の視点は動く。外務大臣の風波涼子なみりょうこである。風波は東大卒の真正銘のキャリア組で、これまた能力がすごい。特に言語・外国文化に精通していると聞いたので、派閥は違えど内閣に入れた。派閥は違えど言っても、彼女の場合は勝手が違う。彼女自身が派閥を作っているのだ。能力があるということで彼女についていき、彼女が首相になることを推して次期ポストに就こうとする狙いを持った人間が多いのだ。そのため風波派と黒篠派はあまり仲が良くない。しかし風波自身はそこまで変に意識せずに小峰と付き合ってくれている。

また別に窓から外の景色をカーテンの隙間から眺めている女性がいる。彼女は財務大臣の嘉条蓮かじょうれんである。女性でかつ38歳と政治家としては若さと敏腕で知られている。彼女は派閥云々の事情とは関係が無い。というのは民政党の議員ではないからだ。民政党は5年前から諸連合クラブの中で一番勢力を持つ民主連合と提携を組み、

連立政権を成立させた。その民主連合の議員なのだ。彼女は民主連合では政調会長という職についており、40歳を過ぎる頃には代表の座に就いていても一向におかしくないほどの注目を集めている。

立って壁の上に置いてある歴代総裁の写真を落ち着いて眺めているのは経済産業大臣の早川哲である。省庁合併の際、農林水産は第1次産業なので経済産業省に吸収された。そのため権力もさながらとても忙しい職である。ところがそれをこなすのがこの早川である。51歳とそれなりに職を経験しており、黒篠内閣の頃からずっと経済産業大臣を務めているベテランでもある。また黒篠派の古参であるがゆえに、小峰としては複雑な気分であるがポスト小峰の候補の1人である。

彼の怖いところは滅多に感情を表に出さないことである。彼が何を考えているのか、自分をどう思っているのか小峰に知る術は無かった。いやもちろん「僕のこと嫌い？」と聞いたら嫌いとは言わないだろう。だがそれが本当の気持ちかどうかはわからない。一応仕事上の先輩後輩の関係も踏まえているからだ。そういうことがあまり好きではない小峰だったが、彼はなかなか心を開いてくれる場面が無かった。

法務大臣・那流茂久なりゅうしげひさとはあまり仲が良くない。彼の態度はいつ見ても自分のいる首相の座を狙っている態度なのだ。それはさすがの小峰にも腹立たしいことだった。内閣として一丸になってやっていることとしているのに、自分の総裁への出世のことで頭がいっぱいというのは小峰にとって許せない。彼は一応小峰より年上で風波派である。だが風波派である以上風波が先に首相になるであろう。そう考えると彼が首相になる番がやってくるのはずいぶん後で、引退とどっちが早いか競争でもある。

残る大臣はは国土交通大臣・長島理恵である。彼女はとてもはき

はきした人間だが、その代わり自分の非をなかなか認めようとしていない。それが国土交通大臣としての国民からの支持を冷たくしているのは事実だ。彼女もまた民主連合の議員で、副代表である。代表は今期で引退すると先日表明したので近く彼女は代表となるであろう。代表となった場合は内閣に入れておくとか何とかと良くないし、国土交通大臣に留任させるのが本当にいいことかどうかもまた微妙だった。

そして末崎誠一郎である。彼とはヒヨコ政治家だった頃からの政友で、このような忙しい職に就くまではお互いにディナーに誘ったりと公私ともに親しい関係があった。今も親しいのだが、その親しさがテレビの報道に乗るといまひとつ小峰は見ていていい気持ちがない。政治の関係は汚い。それはそうかもしれない。でも全てが汚いわけではないことをわかってくれるテレビは無いのかとただ溜息をつくばかりであった。

「何を皆さん、ビクビクしているのですか。ちょっと私はトイレへ行ってきますよ」

那流は扉へ歩き出す。皆は黙る。

「那流さん、お待ちください。相手の要求を聞かないで身を投げるのは良くありません」

小峰はできるだけ丁寧にな流を注意する。

「何を言っているんだ！ 小峰さん、あんたはただ相手の脅威におびえているだけだよ。そんなんじゃないかね、何も改革は始まらないんだ。それがあんたの今までの2年間の政治じゃないか」

それは確かにそうだった。小峰は返す言葉が見つからない。

那流は出て行った。

「那流さん、遅いな」

早川がつぶやいた。確かにもう10分経っている。

「様子を見てきましょうか」

風波が立ち上がってそう言うのを小峰は制した。今は外の状況が分からなすぎる。その中を進むのは堂考えても危ない。まずは状況がわかるまで我慢したほうがいい、と説得した。風波は席にまた座った。

すると、遠くから銃声が聞こえてきた。

「……！」

全員、那流以外全員が寒気を感じる。アナウンスが流れる。

「内閣改造は法務大臣から行うことになったよ。彼は体の中を綺麗にしてから逝ったから幸せだな。新しい法務大臣を紹介しよう」

「いい」

小峰は拒否した。

「そうか」

どうも小峰たちはカメラなどで監視されているようだ。

「ま、不用意な行動は避けることだな」

彼らによる内閣改造が、今始まった。

2・何か買ってきます@2016・6・13 18:12

原理党の言うことを聞かないと殺される。

どうやらこれは現実らしい。那流の死は皆への一番の証明になった。

だが、一人ひとり脱落していく。

次は誰が内閣から消えるのか？

とはいえ皆、この現実を受け止めて閣議室で黙っている。テレビを見ているだけでも日本中が大変なことになっていることがわかる。ニュースに新しい情報が入った。

「国土交通省の主導権が原理党に移ってしまったようです。警察・国連軍が機能していない今、交通網までもが占領下におかれてしまいました。政府が完全に機能していません！ 皆さん車での移動は控えるようにしてください！」

リポーターの声がすごい。そして長島は唇を噛む。

「まったく、どうしてうちが」

「次に国民の動きを掌握しようとしているんだろっな」

小峰にはそう映った。

東京霞ヶ関は原理党の過激派武力勢力により一般道路も人払いがされている。JR線が近くに無い霞ヶ関付近で今生きている交通は都営地下鉄のみである。その都営地下鉄も近々原理党によって封鎖されるのだろっ。原理党は国民の動きを止めて何をする気なのだろうか。ニュースは鉄道関連のニュースを流し始める。

「こちら都営地下鉄霞ヶ関駅です！ 列車が3分ごとにひっきりなしに発車している今もホームは満杯です！ 政府が機能していない

今は電車のみが確実な交通網となっています！」

リポーターの言うことは冗談でも誇張でもなくてもなく、本当にプラットホームは一杯でホームに降りる階段では駅員が規制をしている。

次に手が伸びたのは、高速道路だった。ニュースのテロップに、「首都高速封鎖される 各IC・PA・SAの締め切り、長蛇の渋滞」

という文字が躍り出る。それは帰省ラッシュの程度ではなく、渋滞というよりは封鎖により閉じ込められた乗用車の列である。歩くほうが早い今次々に運転手は降りて、高速道路を歩き始める。商談の接待をしていたらしき会社員たちは途方にくれていることだろう。

それから2時間が経った。午後5時、小峰は天井のスピーカーに向かつて言う。

「お前らの目的は何だ」

すると原理党はあっさりと即答した。

『小峰内閣の改造だ』

「では人事を君達に一任したら解放してくれるかね」

『それは不可能。原理党による小峰内閣の改造は小峰幸三も辞任させて、味内閣を発足させることだからだ』

「味……？」

小峰にはどこかで聞き覚えのある名前だった。天の声は嘲笑しながら答える。

『知らないのか？ われら原理党の代表、味幹夫様だ。彼こそが次期首相であり、彼の認められた人間以外が首相になるのはふさわしくない』

「だが日本にいる以上それは不可能だ。日本は間接民主制・国民主

権の国だからな、衆議院が可決しないと味氏は首相になれない」

「まったくもってその通りだ。彼が首相になればこの日本は幸せだが、今のダメなシステムでは味様は首相になることが難しい。そこでこのような強行策を使って味政権をまず軌道に乗せようとしているのだ。導入段階は確かに乱暴だ。だが、味内閣は日本国民の幸福を絶対保証する」

「そう、国民に公約を宣言すればいい話だろう」

「お前ら民政党のせいで、それができないんだ。特に東北ブロックの田舎の選挙区の場合、民政党しか名前が知られていない。だからどんな公約を掲げてても不利なのだ」

「絶対がつく公約なら負けないんじゃないか？」

少し小峰は喧嘩腰になっていた。

「黙れ、自分の身分に気づいてから言うんだな。お前は捕虜の身、殺さなくても何ならお前らを拘束している間に味新政権を発足させることも可能だ」

「わかった、要求に従っていることとしよう」

まだまだ戦いの終わりは遠そうだ。

6時。閣僚たちはさすがに話すのに疲れてきて黙りこくっている。

突然天の声がした。

『総裁室のロックナンバーを言え』

「無理だ」

『言え』

原理党は有無を言わさぬ姿勢だ。

「断つたらこの部屋に押し入ってくるかもしれません。最悪の事態は避けないと。言いましょう」

末崎が小峰にすすめる。小峰も仕方なしに納得して言う。

「4368だ」

『それでよろしい』

そして天の声はしなくなつた。

「お腹が減りました。少し何か買ってきます」

長島が突然言い出した。

「何を言っているんです。殺されますよ。おとなしくしてしまし
う」

菊名は普通に止めようとする。

「そうです。今は落ち着いてください」

小峰までが言つと、長島は何かの糸が切れたように言った。

「偽善者面して、辛くないんですか？」

「何が偽善者ですか、今は皆の命が大切でしょう」

小峰はそう言う。だが長島の反発は止まらなかった。

「それが偽善者なんですよ。だいたい言つてしまえばいいじゃない
ですか。このうちの誰が明日閣議に出られて、誰が出られないのか
そうすれば敵味方もはっきりするでしょう？」

「こんなときに敵も味方も無いでしょう」

末崎が小峰のフォローに入る。

「あなたもそう、官房長官以上の座は確保されてますものね、小峰
さんの言うことに従うはずですよ」

「何を言つんですか、そういう不謹慎なことを言わないでください」
末崎は続ける。

「まだ改造内閣は発足していません。ということは僕らはまだみん
なで内閣なんです。小峰内閣の閣僚なんです。改造内閣を原理党の
手に渡す気ですか？ あなたが改造内閣の閣僚である確率は低くあ
りません。まだ分からない今は皆一丸となっているべきでしょう」

『おやおや、仲間割れか？ これは内閣改造の必要が迫ってきまし
たな、小峰総理』

「大丈夫だ。なんとかなる」

「なんとかなるわけないわよ！」

長島が叫んだ。

「はつきり言うけどね！」

「長島さん」

静かに、嘉条が言うと不思議に長島は黙ってしまった。

小峰はこの二人の間に何かがあり、それを隠しているように見え
た。

午後7時半、その秘密は自然にベールが剥がれてしまうのだった。

6時台、原理党の政治支配の手はついに親玉に届いた。

「えー、先ほど経済産業省が占拠されました！ 経済産業省が占拠されました！」

これは大変なことだった。経済産業省は名の通り産業を握っている。また、農林水産も含まれているので、やろうと思えば会社の業務停止命令なども出せる状態になってしまったのだ。そして早速その実権は行使されることになる。

「各種電話会社への3日間の業務停止命令が出ました！ 各種電話会社への業務停止命令です！」

情報網の封鎖も始めた。このまま行くとテレビ局の支配も近い。業務停止命令ならともかく、電波を使って情報を発信し始めたら大変なことになるのは見えていた。

『それでは、味内閣を編成していくことにするが』

天の声は衝撃の言葉を発した。

『先ほど、総裁室に潜入したところ改造内閣の人事関係書類が見つかったぞ』

「やめろ！」

小峰は叫んだ。それだけは避けたかった。一丸となっていなければならぬ今の状況で人事などを発表すればどのような事態になるか予想はできる。

『これで小峰内閣もバラバラだな。それでこそ改造の甲斐があるというものだよ』

「やめろ！ 卑怯だ！」

『卑怯なんかじゃない。今の政治のダメなシステムを根底から覆そうとしているのだ』

「いいじゃない」

そう言ったのは長島だった。

「新しい人事が分かれば、自分の身の処し方も見当がつくかもしれない」

「でも……」

小峰はそれだけは避けたかった。

『内閣のメンバーがそういつているならなおさらいいじゃないか。個人個人の決意が固まるだろう、いくぞ』

「うっ……」

政治権力が無い今、手も足も出ない。

#####

内閣総理大臣 小峰幸三（留任）

内閣官房長官 末崎誠一郎（留任）

総務大臣 菊名芳郎（留任）

法務大臣 阿佐玲（民政党新人）

外務大臣 風波涼子（留任）

財務大臣 黒篠健也（厚生労働教育大臣）

厚生労働教育大臣 桐谷幸平（民政党新人）

経済産業大臣 石島さや（民政党新人）

国土交通大臣 嘉条蓮（財務大臣）

国家治安維持委員会委員長 唐山新（留任）

< 解任 >

那流茂久、早川哲、長島理恵

#####

『以上だ』

「ちよつと待ちなさいよ」

長島が言った。

「私がないのはともかく、民主連合が減っているじゃない！ 連立政権の関係を壊す気ですか、小峰さん？」

「いや、長島さんは近く代表になるだろうから……」

小峰は本音をなるべくとげがないように言った。

「そんなの決まっていけないし、代表になったからと言って大臣がでないわけじゃない。何故ですか？」

「それに国土交通省の不祥事が例年より多かった」

「そう」

長島は諦めたように言った。

「しかもこれは閣議に入る前に書いたもの。那流さんも解任されているわ。那流さんは死ぬべくして死んだのね。皮肉だわ」

「そんなこと言うのは良くありません。那流さんにも小峰総理にも失礼です」

末崎のフォローはもう、届かなかった。

「うるさい留任偽善者！ あんたみたいな人に気持ちかわかるわけないわ！ いつも小峰さんと結託しているんでしよう！」

「そんな」

末崎は否定しようとした。

「悪いですが、僕も賛成です。民政党に人材が寄りすぎていますし…… なんですか、民主連合は形だけの連立ですか？ そして今まで連続で経済産業大臣を留任してきた私を辞めさせて若い新人を出すなんて…… 総理は後継指名を末崎さんと決めているのですね」

早川も長島に加勢する。

「そうじゃない」

小峰は否定する。思ったとおりの悪い事態が起きた。どうにか食い止めないと……。

「黒篠さんに相談したら、石島議員がいいと、」

「私のせいにならないでくれるかな、小峰君」

黒篠が制した。小峰は決して嘘を言ったわけでは無かった。次の経済産業大臣は石島に絶対してくれと言ったのは確かに黒篠だった。でもこの場では黒篠は何事も無かったことにしているのだ。黒篠もまた偽善者だった。

小峰の娘、菜々子は25歳できちんと社会人として働いているが、いまだに実家によく来る。晩御飯の時間なのだが、テレビを付けると閣僚達の拘束やクーデターについての報道であふれかえっていた。「お父さん、大丈夫かな」

菜々子は心配した。大物の父親が持つリスクは普通の人の父親より小さくはなかった。

テレビは普段の番組表とは無関係に情報を流し続けていた。そして小峰が一番恐れていたことが始まる。

「原理党が国会の召集を議長に要請しました！」
まずい。この状況から言って総理大臣を変えるのだろう。閣議室という国会議事堂の中にいる自分たちは手を出したくても出せない状況だ。

「まあ、でも民政党のほうが人数多いから……」
風波はそういったが、菊名が否定した。

「交通状況が不利すぎる。場合によっては永田町周辺の交通を麻痺させることもあちらさんには可能だからな」
「まあ……」

「とにかく今晚を無事に過ごすことも大事です。時間で警備をしましょう。原理党は命令に歯向かわなければ殺さないと言っているが、何をするか分からない。時間で警備をしましょう」

小峰がそう言ってもきかない人間が出てきた。早川だ。

「あなたとはもう同じ職場の人間じゃないんですよ？」

「早川さん！」

小峰は真剣だった。早川はその剣幕に、やむなく従った。

小峰はこのゲームの結末を全く予想できなかった。それは早川にとっても末崎にとっても味方敵関係無く同じことだった。

「味内閣がただいま！ ただいま成立しました！」

テレビは祭りの雰囲気とその事件を伝える。

小峰前内閣のメンバーはただただそれを空しく見つめるだけだった。

夜は原理党の言うとおり、何も起こらなかった。起こったのは朝である。

国会の緊急招集、そして言い渡された政権交代。

今の原理党に冗談も皮肉も通らないことを、小峰は実感せずにいられなかった。

人間と言うのは武力にこれほどにも弱いのだろうか。

まず交通封鎖は予想通りだった。国会はさらに想像を絶するひどさだった。出席者は原理党ばかりなのだが、東京に住居を構える民衆の議員数人はかろうじて出席することができた。だが原理党の行動に容赦は無かった。始まる前からNHKではすでに中継が行われていたが、それはそれはひどいものだった。来た議員に銃を向け、帰ることをうながすのだ。議事堂はまるでコロシアム、口論より武力、民主主義を忘れた議会だった。小峰だって政治の汚さの一面は知っている。だがここまであからさまに汚い現場を目にすることは無かったし、国民はなおさらだろう。衝撃のドラマが淡々と行われていた。

議長が入ってきた。もちろん議長は民政党の議員である。来た議長を原理党議員が座らせ、自分達も座る。罵詈雑言で議長に向かって始めることを要求、首相指名が開始された。

もちろん味の名前以外あがることはなかった。出席180人中180人満場一致の賛成と議長への武力による警告で、嘘だらけの政権交代が行われた。

「信じられませんな」

閣議室の空気を唐山が切った。

「こんなことがあからさまに国民の皆さんに見せられるなんて……原理党め、我々の復活のあとにはただでおかんぞ」

「じいさん、そんなことを言っても無駄だ。当の小峰総理、いや小峰前総理が民主連合を仲間と思っていけないんだ。ま、あんたは政党と無関係だからいい身分だけだな」

早川はたつぷりの皮肉を唐山にぶつけた。早川は昨日の夜からこの不機嫌さだ。唐山は国会議員ではなく、警察庁の警視總監から引き抜かれた人間なのだ。よってこのゲームとは関係無いのは明らかだが、このゲームを何とも思わないからこそこのような重要役職に小峰は抜擢したのだろう。

「早川さん、そんなことを言っただけいかんよ。まだお前さんは若い。51で経済産業大臣なんてすごいことじゃぞ。たとえ大臣から外れても議員の身分はあるんだ。まだまだチャンスはある。次は大臣じゃなくて総理大臣かもしれん」

「じいさんあんた本気で言ってるのか!? 次の総理大臣はどうせ末崎さんだよ。小峰のお墨付きだからな! だいたい議員の身分なんてこの状況じゃ何の役も成さない! 新人事に漏れた上に小峰と一緒に死ぬのか……ふざけんなこの野郎!」

早川はもはや小峰を呼び捨てにしている。

「お前さんは誰にいらついているんじゃ。小峰さんか? 原理党の連中か?」

「どつちもだよ!」

早川は小峰を睨んだ。小峰は残念そうな顔をしたあと、目をそら

す。偽善者の皮が、薄い人から剥がれていく。

それから早川は小峰の顔を見ようともしなかった。小峰は唐山に近づく。

「まさか、こんな風になるとは思いませんでしたよ唐山さん。四方八方から『小峰の政治は御無難政治』と言われたので、人事を改造したらこのザマです。改造や改革をしなかったら叩かれる、したら他のメンバーから叩かれる。どうしたらいいんですかね」

「そんなことを聞かれても困る。総理大臣はそんなもんだ。お前さん政治家長いからわかるはずなのに、普通の政治家と違ってまつすぐだからな。良くも悪くもだ。左にも右にも敵がいるのは仕方が無い。だが、その敵の数を減らすのはあなたの仕事だ。でも0にはできんし、最初から0に挑むのは間違つておる」

「そうですか」

そして小峰は窓からすつかり混乱した永田町を見て言った。

「私は総理大臣失格なんですかね。味さんのほうがチャンスを与えれば成功するかもしれませんね」

いつしか自分を自分で皮肉る手しか小峰には残されていなかった。

「馬鹿者！」

唐山は叫んだ。

「そんな弱音を今、この状況でどの口が吐けるんだ！」

「まったく、とんだサプライズを誕生日でも無いのに受ける羽目になつてしまつたな」

尾崎は原理党本部に一番に帰り、誰もいない応接室で呟いた。

昨日の尾崎は原理党選挙対策委員会委員長、今日の尾崎は国家治安維持委員会委員長。同じ委員長でも大違いだ。

「確かに、原理党を味さんと大勝に導いたのは事実だが」

尾崎はダラダラとクーデターを伝えるテレビを一瞥した。
「うほうびにしては、ちと大きすぎるな」

「ふっふっふ、哀れなる民政党諸君今を以って君たちは内閣のメンバーでは無くなったことはテレビを見て、深く思い知っただろう」
「じゃあ解放してくれ」

小峰の要求はあっさり破棄された。

「それは出来ん。君たちはただの政治家だが、原理党にとっての要
注意人物であり続けることは確かだ。もうしばらくご辛抱を願いた
い。お詫びに新人事を君達にも教えてあげよう」

「そんなことはどうだっていい」

その小峰の発言こそどうだっていいと言わんばかりに、アナウン
スは新人事を言っていた。

皆が思い思いの表情をして天の声を聞く。「内閣総理大臣 味幹
夫」などは予想の範囲内だったし、他の閣僚も聞いたことのある名
前だった。

「国家治安維持委員会委員長 尾崎公太」

「……！」

皆が無言で、驚きを露にする。

「最後はちよつとサプライズだったかな？ それではもうしばらく
のう辛抱」

そういつて天の声は途切れた。

尾崎は小峰や末崎が可愛がっていた、弟子政治家の一人である。
他の弟子よりも大物になる素質を持っていたのは確かだった。

彼は黒篠内閣の成立とともに厚生労働教育大臣に就任した。誰も

が彼の大出世を望んでいたし、事実喜んだ。

だが小峰内閣発足時、彼は閣僚の席にいなかった。

それは前代の内閣が大敗により総辞職した事情から、30年ぶりの連立政権を組む事態が発生、民主連合を視野に入れた新人事は尾崎の席を用意出来なかった。

それから小峰も末崎も尾崎を見ることは無かった。そして気が付けば、野党原理党が地方で結成され、衆議院議員補欠選挙の味の選挙活動の時に味の横に尾崎がいた。

「尾崎、か……」

空しく小峰は天井を仰ぐ。原理党は痛いところを突くのが本当にうまかった。

「まったく！ 内閣改造で民主連合を軽視するわ、原理党にクーデターをまんまと起こされるわ、小峰さんは総理大臣失格！ 失望ですわ。皆さんもこんな人置いて逃げましょう」

アナウンスが終わると長島が呼びかけた。

「長島さんの意見には賛成ですが、このまま出るのは危険だと思います」

早川がそういうと、「何言ってるのよ！」と長島が何かを言いかけたその時。

黙っていた嘉条が長島の肩に手を置いた。

「小峰さんの民主連合への対応は形だけ」

嘉条は口を開くとそう言った。

「嘉条さんまで……」

小峰は顔をうつむけた。小峰の悲しみがまた増えた。だが、嘉条はさらなる悲しみの水先案内を始める。

「けれど私はそこまで怒らない」

小峰が顔を上げる。だがそれは希望の意味ではなかった。

「何故なら民主連合もまた形だけだから」

「……！」

誰もがその淡々とした嘉条の言葉に驚いた。

「形だけ？」

末崎は聞く。形だけ つまりどういうことなのか。

「民主連合の実態は原理党の親団体。だから我々はいわば刺客。選挙・世論の状況により互いの党員を相互運用してきた。そのうえ小峰内閣は形だけの連立与党、民主連合の議員を内閣に組み込んだ。これで原理党の力は絶対になるところだった」

小峰は歯を食いしばる。親団体？ 連立与党が？ 与党なのに野党の親団体？ 混乱が渦巻く。

「ところがあなたは衆議院解散の際に内閣改造を宣言した。これは我々の計画が丸つぶれ。何故なら、この総選挙で原理党の議席数が伸びて民主連合の大臣を足場に入閣、最終的には民主連合からの連立政権の破棄と原理党との提携もしくは合併、そして味さんを中心とした組閣を考えていたのに、内閣改造の新人事によって足場である民主連合出身の大臣が消えてしまっただけでは計画が台無し」

「なるほど……」

菊名は感心したが、口をつぐんだ。もはや涙まで流している小峰を見てしまったからだ。

「言っておきますが、あなたは悪くない。汚いと思われたとしても事実これが政治の世界。永田町では日々こんな汚いゲームが行われている。私はこのクーデターは予想していたし、だからこそ落ち着いていられた。ゲームの中身が分かっている私たちは今、ここにいる理由は無い。よってここを出る」

嘉条と長島は目を合わせ、二人扉に向かう。嘉条は長島に向き合って、

「まずあなたから行きなさい。私はもう少し我慢できるから」

「そうですね、ではお先に」

そう言って長島は扉から出た。

「……味方じゃ無かったですね。あなたたちはもうこの仲間じゃないと。いろんな意味で」

末崎は溜息交じりに言った。嘉条は何も言わなかった。その時である。

「裏切り者！」

外から長島の声が聞こえてきた。そして続く銃声。長島も命を失った。

裏切り者にはさらなる裏切りが待っていた。

「どういうことよ！」

嘉条は天井に向かって叫ぶ。

「今のは民主連合の長島さんよ！間違えていいことと悪いことがあるわ！」

『間違いではない。その証拠に裏切り者、と長島は言って死んだだろっ』

嘉条は息を飲んだ。

『話は聞いたが、こっちから言わせてみればその民主連合の方が形だけさ。原理党の仲間という名目で利用はしたが、仲間意識を持ったことは一度も無い。勝手に仲良くなっただつもりになるのはやめてほしい』

「何よそれ！」

とつとつ嘉条は泣き出した。

「何よ！何が本当なのよ！連立与党は形だけ、でも原理党の親団体も形だけ、どれに中身が入っているのよ！」

発狂したかと思うと、嘉条は外へ飛び出していった。そして銃声の嵐が扉の外から聞こえてきた。「裏切り者！」という涙交じりの声とともに嘉条もまた散った。

「なんなんだよ！」

小峰は机を叩いた。

「とりあえず、非常食のカップ麺でも食べましょう。お湯もなんとか沸かせますから」

菊名が小峰に優しく話しかける。だが今の小峰にはその菊池の言葉も悪魔のささやきではないかと疑えてしまう。皆も非常事態だけあって反対はいなかった。ところが。

「カップ麺だと。ふざけるな」

異論を唱えたのは黒篠だった。

「黒篠先生」

風波は何とか説得しようとした。

「今は緊急事態です。食べるものが無いよりマシじゃないですか」「ふん。じゃあ私は遠慮しておくよ。一応カバンの中に非常食があるのでね。薬を飲むのでお湯だけ貸してもらえるかな」
まあ持っているなら構わないか、と思って菊名も風波も承諾した。そしてそれぞれの昼食はあっという間に終わる。政治家である彼らにとってこんなに食事が美味しく思えたのは久々だった。そしてこんなに楽しくない食事も久々だった。

「そろそろ冷めたのでいいでしょう」

そう言って菊名はお湯を黒篠に渡した。黒篠は「うむ」と言っ
て受け取った。薬は食前服用のものらしく、黒篠はまだ食事をしていない。

「さてと」

薬をカバンから出し、飲んだ。

「……よし、いい加減食事にしよう」

そう言っ
て彼は閣議室の押入れから食器を取り出した。食器の割れる音がした。皆が振り向いた先にあったのは、割れた食器と血を口から出した黒篠だった。

「黒篠さん！」

末崎が駆け寄る。すると早川がさらりと言った。

「無駄だ」

そしてアナウンスが入る。

『即死だ』

「貴様、早川！ なんてことを！」

さすがの末崎も怒りを隠せない。だが黒篠の反応は予想外だった。「早川！ 車田！ お前ら俺のおかげで当選したり閣僚になれたりした恩を忘れたか！」

黒篠は叫んだ。車田というのはアナウンスをしている男の名だろ
う。

「あいにくだが、記憶に無い」

早川のその非情な言葉を聞くと、絶望したように黒篠は眠った。

「本当かい、そうか。じゃあ」

尾崎は電話を切った。どうやら内閣の民主連合組2人が閣議室から出て殺されたという。小峰内閣などという生ぬるい湯に浸かっているからこんなことになるんだ、と嘲笑する尾崎がいた。

とは思いつつも。

尾崎も罪悪感が無いわけではない。政治家デビューと同時に民政党へ入り、派閥こそ黒篠派だったものの、政治は汚いことをするためにあるわけでないということをお峰と末崎に習った自分の心がまだうずいている。自分ではそんな気持ちを揉み消しているつもりなのだが、深いところにも二人の教えが染み込んでいて、ひどく悪いことを出来ない自分がいる。

「いいか。永田町にいる政治家のほとんどが、まるで政治がまるでゲームであるかのように軽く考えている。自分達で何でもできるとか、国民から選ばれたことを必要以上にアピールしたりとか。この状況はどう考えたって良くない。俺は早く総理大臣になったらお遊ばしゲームをやめさせてやる。そしてお前も総理大臣になったらお遊ばし感覚の政治に対していつも厳しい目をするようにしろよ」

尾崎は自分を叱責した。何でこんな大事な改革の時に、小峰のこんななんか思い出すんだ。何も改革することが出来ないくせに。俺は味さんについて行ってくつて決めたんだろう。自分の気持ちで。自分の……。

尾崎はテレビをつけた。

「8000万人の全日本人に告知する！」

味がNHKに出ていた。NHKが国営であることをいいことに、原理党が占拠していた。

「この日本は我々味原理党が政権を獲得した！ 我々は改革を推し進める！ それにあたっては全情報網を封鎖し、原理党の広報設備として使う！ また国民は我々の政策に口出しすることの無いよう、心がけよ！ 君達のもうしばらくの辛抱の先には！ 原理党が作る明るい日本が待っている！」

なおさら尾崎の心は痛みを増す。

「……………」

小峰を初めとする全員が黙りこくっていた。

「早川さん、今一人でも多く生き残ろうとしている時に何故あなたは……………」

末崎も追及する気はもう無い。早川は

「これが政治の世界だ」

と開き直っている。

小峰は顔を上げて、窓の外の景色を見た。

「こういう政治には一番したくなかったのに」

いくら原理党のクーデターの影響力が強くても、国民も馬鹿では無かった。原理党の中途半端な支配により廃れている政治を取り戻すべく、地方議会の民政党議員がデモを起こしているようだった。

最初のうちは原理党も一つ一つ丁寧に潰していたが、とうとう間に合わない数に届こうとしていた。

状況が一変したのはこの時だった。

『車田、出動命令だ。地方でクーデター返しが起こっているらしい。今すぐだ！』

アナウンスの声が変わった。それは、まぎれもなく尾崎の声だった。

「尾崎！」

小峰は叫んだ。闇の中のほたるを逃すまいという声で訴えかける。「お前は今、重要な職に事実上いる！ 話したよな！ そういう職に付いた時にはどうすればいいのか！」

自分もまた日本国民の一人であることを忘れず、一般国民の立場で命令をする。と言いそうになるのを堪えて、尾崎は演じるほうに集中した。

『黙れ』

小峰の顔色が失望に染まる。

『今の尾崎公太は国家治安維持委員会委員長だ。私が全ての軍事力・社会的拘束力を持っている。お前らの言動によっては自衛隊だって出動させられるんだ。お前から民政党は私達にしてみれば武装テロ組織と同じくらい危ない存在だからな』

『尾崎……』

末崎も言葉を失う。ただ一人笑っているのは早川だけだった。

『閣議室から出ててもよい。今に原理党の人間は国会からいなくなる。ただし議事堂から出たり、召集などをしたら、』

自分の立場と良心をはかりにのせながら、尾崎は声を振り絞った。

『命は無いと思え』

早速、6人は閣議室を出た。風波は唐山に終始気を配っていた。

そうして歩いていくうちに自然の足は議場に付いていた。参議院議場である。

『さて』

末崎は小峰の方に向き直った。

『ふむ、動くなと言われたが……』

小峰は内閣のメンバーを見渡す。

「動かなければ黙って負けることになります。ここは参議院緊急集会を召集しませんか」

「そうは言っても通信網が……」

末崎が言いにくそうに言っている一方で唐山は民政党本部に電話をかけていた。

「あ、もしもし」

もう電話はつながっていた。小峰はとりあえずの勝利を確認してホツとする。

「クーデターがすごいことになっている」

車田が原理党本部に着くと、幹部達が真面目な顔をして立って会議をしていた。

車田も小走りにそこへ向かった。

「とりあえず警察を総動員させろ」

味の命令に皆は

「了解！」

と意思を示す。もちろん尾崎もである。

「車田」

車田は味に呼ばれた。

「なんでしよう」

「閣議室の監視、ご苦労だった」

「いえ、大したことではありません」

「ところでだ」

「ん？」

味は声のボリュームを絞って言った。

「尾崎のことだ」

「尾崎先輩？」

「そうだ」

尾崎は警察庁本部へ向かった。さつき味に言われたことを実際に警官達に命令するためである。警察庁に着くと、今の社会状況から

いはわかつているらしく、皆顔が合つと尾崎に一礼して下がっていく。それは地位が上がったことを示すのだが、どうも尾崎には気持ちよく感じられなかった。なので彼は

「挨拶はもういい。今日は命令をしに来ただけだ」

と言つて皆のわざとらしい挨拶を辞退した。皆が静まつて尾崎、いや原理党の命令を聞き入れる態勢になつた。

「民政党の党員があちこちでデモなどを行っている。『治安維持』の名の下で検挙しろ」

午後5時、参議院緊急集会の連絡が一通りの議員に伝わつた。ここではもう与党野党などと言つていられなかつた。むしろ原理党であるかないかが重要で、原理党以外の野党の事務所にも召集の電話をかけた。小峰にいつも敵対的姿勢を取る他の野党の党首達も今日という日は彼に味方をしていた。

「準備はできましたね」

末崎はそう言った。

「では少し手洗い言つてきます。皆さんも行つておいた方がいいですよ」

小峰がそう呼びかけた。

「では私はここで残つて異常が無いか見ています」

やはり末崎は気が利く、と思ひながら小峰は、
「頼んだ」

議場に残つたのは末崎と早川と風波である。

早川は黒篠が死んだ後から全てを知っているような顔でにやにやしていたが、

議場にいる早川の顔は青ざめていた。そして。

銃声が議場に響き渡つた。早川が倒れる。

「誰だ！」

原理党の人間が見張りに来たと思い、末崎は叫んだ。だが誰も出てこない。

「誰が銃を持っているんだ……！」

末崎は驚愕の顔になった。

銃は風波の手に握られていたからだ。

銃口がゆっくり、ゆっくりと末崎へ向かう。

「貴様！ 何をする！」

傷口を押さえながら、早川は叫んだ。

「黒篠先生を殺したのはあなたでしょう？ 黒篠派を消したのはお手柄。それを評価してあなたも消そうとしているだけ」

風波は怖いくらいに落ち着いている。

「何！」

早川は突然の大声を出したあまり、むせかえる。そして動かなくなつた。

「あなたが死ねば、黒篠派はずいぶん減るわ。我々風波派の天下」

「風波さん……」

末崎が続けようとするのを風波はさえぎつた。

「問題。今銃口は誰に向けられているでしょう？」

末崎だ。

「……」

「あなたとは敵ではないはずよ？ この早川という男は黒篠派でありながら、原理党車田と結託していた。それを私は殺したの。でもあくまで派閥は違うから仲間でも無いけど」

「同じ民政党でしょう」

末崎は口を開いた。

「同じ民政党として、同じ小峰内閣のメンバーとして、」

「うるさい！ 政党なんてのは似た主張の皆で集まってまとめて当選を狙うためにあるだけで、結局は個人の欲をまとめて晴らすためのもの。そうでなければ喧嘩することも派閥同士で争うこともあるわけないじゃない」

「それを、小峰さんは無くそうとしているんです」

「あー、もう黙ってちょうだい！」

末崎は勅に従ってさっと、しゃがんだ。さっきまで末崎の頭があ

つたところを、銃弾が通過する。

「何をしている！」

小峰たちがトイレから帰ってきた。風波は懐に銃をしまつて、微笑んだ。

予想よりも参議院議員はたくさん来た。議長も来ていたので、今後の対策等について話し合うことにした。

小峰はとりあえず久しぶりに安堵の表情を浮かべることが出来た。だが、隣の席に座っている風波を差し置くわけにもいかなかった。さつき末崎に向けられていた物は何だ？ 拳銃だ。そんなことは分かっている。何故風波が持っている？ そして何故に末崎に向けられていたのか？ 何よりも 何故早川を殺す必要があったのか？ 開会まで時間はしばらくある。

「『治安緊急維持法』によって逮捕する！」

街中で警察のその同じ声が響いていた。

原理党はすぐに全国の政令指定都市を中心に警察・機動隊を配置し、治安維持の名の下で検挙・逮捕を行った。

「げ、言論の自由を脅かす気か！」

「うるさい！ とつとと乗れ！」

今から100年前、同じようなことが日本では起こっていた。歴史は繰り返すという言葉はあながち間違つてもいないらしい。変わったのはパトカーで対象者が連れて行かれるようになったことだけか。

警察庁警視総監室。尾崎の電話が鳴った。

「ん。もしもし」

「味だ」

「ああ、味さん」

「これから重要な話がある。悪いがまた党本部に戻ってきてくれな
いか」

「……わかりました。1時間程度でそちらへ」

「うむ。頼んだ」

電話を切る。力が抜けたように、警視総監室のソファーに身を落
とした。

「こんなに忙しいのも困りものだ」

そう言いつつ、警視総監に軽く声をかけてから警察庁を出た。

尾崎は警察庁を出ると、今は到底運営しているとは言えない形だ
けの都営地下鉄の駅に向かった。車を止めてあるのだ。この政治街・
永田町は封鎖されている分、どこよりも車の便は快適だった。

その尾崎の後をつけている人間が一人いた。それは彼の知らない
人間ではなく、むしろ身近な人間だった。

車田憲明である。

「（こんなの、何の役にも立たない仕事にしか思えないけどな……
俺は政治家敗戦街道まっしぐらか？）」

そう思いつつも、今のこの状況で原理党にいない手は無い。尾崎
の姿が見えなくなりそうだったので、彼は追いかける。

あの後には続きがあった。

「尾崎先輩？」

「そうだ」

「先輩が何か？」

「うむ」

味は少し車田から目を反らした。

「尾崎は今頑張っている」

「そんなこと、分かりますよ。それに今日から国家治安の委員長ですし……」

「だがな、そういう大事な職に就いてもらったからには我々の方針に逆らってもらっては困るのだ」

「え……」

車田には味が何を言っているのか理解出来なかった。

「だって、尾崎さんが反逆やクーデター返しなどをするはずは無いでしょう？」

「俺もそう思う」

「だったら……」

「でも、俺らと尾崎は違うんだよ」

一瞬味の目が緩んだような気がした。尾崎に対してすまなそうな目。

「俺らは所詮アンチ民政党だ。でもあいつはきちんとした政治家だ。今に大物になるよ」

「そんな、味さん……なんか今日変ですよ？」

「いや、大したこと言っているわけじゃないんだ。とはいえ」

味の目が普段の厳しい目つきに戻った。

「原理党として名前を刻んでいるからには、きちんと政治家になる前の順序が必要だ。あくまで原理党は民政党の政策に反対することに意味があるのだからな」

「味さん……？」

何だか本当に味の雰囲気がおかしい。それに、自ら原理党の存在を卑下している。車田自身は原理党と味を素晴らしいものだと考えていたのに、味本人にそれを言われては車田も困った。

「とにかく、用件は一つ。尾崎を監視してくれ」

「え！」

「分かったな」

「は、はい」

味は「俺達があいつの味方でいられるのもあと数日かもしれないからな」と呟いて、代表室へ戻っていった。

「風波さん」

小峰は出来るだけ優しく声をかけるように努めた。

「何でしょう、総理」

「何故……」

涙を流したり、大きな声で悲しんだりしたい気分をこらえて口を開ける。

「早川君を殺したんだい？」

風波はその質問を聞いて微笑んだ。小峰にはその顔が不気味に映る。彼女はこんなことを言ってきた。

「総理に失礼なことばかりをするので、射殺しました」

非常にストレートである。確かにここ数時間の早川の行動・態度は小峰にとって目に余るものばかりであった。だからといって、殺されてはそのような彼のマイナス要素を抜きにして小峰の気持ちは悲しみに変わってしまう。

「そんな、そうやってすぐ殺すことは無いでしょう」

「総理」

風波は微笑むのをやめた。

「政治は生きるか死ぬか、殺すか殺されるかのライフゲームですよ？」

それは小峰が一番嫌いなことだった。弟子にもそれだけはしてはいけないと言ってきたことだった。それをのうのうと言うメンバーが自分が組織した内閣の中にいるのが、小峰には耐えられなかった。「永田町を舞台にして遊ぶのはやめなさい！ 原理党にしても民主連合にしても、はたまた君にしてもだ！」

「何をムキになっているんです？ 本当のことでしょう？」

「まあ、そう熱くならないで」

そこに来たのは菊名だった。菊名は水を2つ持っている。

「総理、お好きな方のお水をどうぞ」

「む、ありがとう」

菊名の左手に握られていたカップを素直に受け取った。

「では、風波さんはこちらを」

風波も水を受け取って飲む。

「総理はラッキーでしたね」

菊名は微笑む。

「？」

小峰には意味が分からなかった。菊名は席に戻った。

隣の椅子が倒れた瞬間、菊名の言葉の意味を小峰は理解した。

「……！ き、菊名君っ！」

小峰は菊名を呼ぶ。

「どうしました？」

「風波さんが、」

「あなたも分かっていたはずでしょう」

菊名は笑って相手をしてくれない。

小峰は他の議員に風波を救護室に運ばせた。小峰は菊名を思いっきり睨んだ。

「小峰さん」

菊名はしゃあしゃあと小峰の前に出てきた。小峰は無視する。

「この状況で誰を信じればいいと思います？」

小峰には胸の痛い質問だった。閣僚達が本当の信頼関係で結ばれていたならば、こんなことはおきなかったからだ。少なくとも、この内閣の中の戦いで死んだ早川・長島・嘉条・黒篠・風波は。

「答えは簡単なんですよ」

菊名の目はもう笑っていない。

「自分だけを信じるんですよ。人なんかどうでもいいってね」

尾崎は党本部に戻ってきた。代表室の扉を開けて声をかける。

「味さん」

「お、早かったな」

味は飲んでいたコーヒーのカップを机に置いて、代表室から味は出てきた。

「参議院で緊急集会が行われるようだ」

「何ですって！」

尾崎は唇を噛みしめた。やはり少ない人数でも国会にも人員を配置しておくべきだったと。

「いや、そんなことは別にいい。とにかく小峰たちを早めに叩け」
味は尾崎の目を見つめる。

「相手は仲間割れの処理だけでも大変そうだからな」
「そうですか」

尾崎は内心ニヤリとした。ところが、味から予想外の質問が返ってきた。

「尾崎、俺達を裏切るような真似はするなよ」
そう言って味は尾崎の肩をポン、と叩く。

「え？ 何言ってるんですか、味さん。そんな冗談にもならないことを……」

尾崎の目を見て、味は静かに言った。

「そうだな、冗談にもならない」

「参議院緊急集会を開会します」

議長が声高らかに宣言した。その後、小峰が壇上に立つ。

「皆さん、今日の緊急集会では注意があります。よく聞いて欲しいと思います。」

今回、このような大事件が起こってしまったのは私の責任です。決して否定しませんし、否定のしようがありません。私を責めても大いに結構です。ですが、事は一刻を争っています。今は敵対感を募らせている場合ではないと思います」

小峰の視線は、第2野党 この場では第1野党である の改憲党の代表、綾葉あやばの方を向いていた。綾葉も小峰の視線に気づいたようだ。小峰の言葉が終わると綾葉は挙手した。

「綾葉君」

議長が指名すると、壇上に立つ。

「我々改憲党はこの緊急事態において、小峰首相を中心とした民政
党の動きに従って動き、原理党の異常な運動を食い止めたいと思う」
綾葉の言葉に民政党から歓声が起こった。綾葉は小峰を見つめる。
小峰は軽く頭を下げた。

尾崎はテレビを消した。つまらない。

尾崎が見ていたのはNHKの国会中継である。NHKの実権が原
理党に握られている以上、この国会中継も監視カメラのようなもの
であることに小峰達は気づいていないのか、それとも気づいてい
てあえてそうしているのか、改憲党との協定を結んだ。小峰は綾葉の
協力宣言のあと、こう言った。

「現在、小峰内閣ならびに政府が抱えている大きな問題として、閣
僚の多くが亡くなった事があげられます。この原因は様々ですが、
いずれにしても私小峰幸三の組織力不足であることは事実です。と
にかくまずは原理党から法治系統の組織の実権を取り返し、治安を
取り戻すことを目標にしたいと思います。その後、各省庁の実権を
取り返していき最終的には国会の首相指名により選ばれた新首相を
中心に内閣を構成・首都機能の回復をしていきたいと思えます。こ
の際にはどの政党の人間が首相になっても、挙国一致内閣とするこ
とを考えています。特に民政党から新首相が出た場合は確実にそう
なります」

『挙国一致内閣』。つまり、国の緊急事態として政党に関係なく
構成された内閣のことを指す。日本での挙国一致内閣は歴史史上、
斉藤内閣と岡田内閣の二つしかない。両方とも戦前だ。つまり戦後
初の挙国一致内閣を、小峰は発足させようと本気で考えているよう
だ。

「（このご時勢に何を考えているのやら。そんなことをすれば次
の選挙戦はお互いに遠慮し合ってまともな政策が出揃わない。そう
しているうちに、連立政権だか挙国一致だかはつきりしない内閣が

続いていくことになる。何のために政党があるのか分かっていて小峰はこんなことを言っているのか」

尾崎は嘲笑していた。

「挙国一致内閣か」

味は代表室で国会中継を見ていた。

「ふむ……」

綾葉豊一という味の敵が増えた。わけではなかった。味は56歳、綾葉もまた56歳、二人は政友だった。綾葉は元々民政党の議員だったが、黒篠内閣時代に派閥政治のあり方に疑問を感じて民政党を離党した。無所属の味と元民政党議員の綾葉。考え方は二人とも民政党を嫌っていたが、綾葉は少し事情が違っていた。

「僕は民政党が嫌いなんじゃない。黒篠を中心とした、派閥政治が嫌いなんだ。だから戻るべき時には戻るつもりだ。ま、当分先になることは自明だが」

黒篠から先、黒篠・赤井・小峰と黒篠派の首相が続いていった。赤井内閣はほんの1年足らずで総辞職をすることとなったが、小峰内閣はこれと言った成功も無い代わりに事件も起こしていなかった。小峰幸三という黒篠派でありながら、他の黒篠派の人間とは一味違う存在を綾葉は前から少し気にかけていた。この間の綾葉の発言はまだ味の中を駆け巡っている。

「小峰内閣、もう2年経つね。彼はね……なんか黒篠派の人間の中でも風変わりなもんだよ。黒篠派として黒篠を応援していても、誰よりも政治に対する意志と言つか、芯は硬くて太いと思う。彼みたいな総裁を持つ民政党が長く続く保証があれば、復党を考えようと思っっているとこるなんだよ」

そしてこの綾葉の言葉は早くクーデターを起こすように味の心を責め立てた。綾葉と言う心の中の味方がいるうちに起こしたかった。心の底の主張は違えど同じ野党、綾葉が民政党に復党する前にこの

クーデターを起こさなければならぬと、味の心の中では決まっていた。

「綾葉さんか」

味がボーッと画面を見つめているうちに議長が言い渡した。

「これにて緊急集会を閉会とする！」

「お疲れ様でした」

小峰は末崎や唐山などの閣僚達に声をかけた。そして綾葉にも。

「綾葉さん」

「どうも、小峰さん」

「このたびはどうも……」

「そういう礼を受ける覚えは無いですな。私は国民の立場に立つて考えたまでだ。あなたは敵でも味方でも無い」

一見ぶっきらぼうに見える綾葉が、野党の中で一番信頼できる人間として小峰には映った。

「そうですか」

「ま、」

綾葉は少し顔をゆがめた。

「私がいたころの民政党よりは、ずいぶん良くなっているんじゃないんですか」

今のは嫌味ではないのだろう。だからこそしっかりとしないと。小峰はそんな思いで議場から去っていく綾葉の背中を見つめた。

民放テレビ局、F社。

『6時半になりました。ニュースをお伝えいたします』

ニュースキャスターは原稿を一目見て驚きの表情をした。その表情を隠して続ける。

『各地で民政党によるクーデターが起こっています。ところによっ

永田町ゲーム

てはその地域の警察の……』
原理党本部にもう人は誰もいなかった。

9・お前の出番だ@2016・6・15 10:26(前書き)

久しぶりの更新です。読者の皆様すみません。

9・お前の出番だ@2016・6・15 10:26

「早く叩けばよかったな」

味は永田町を自分で運転する車に乗って走り回っていた。

地方自治体の議会の民政党議員達が原理党に対してデモやクーデター返しを起こしているらしい。

予想外に地方都市はすごいことになっていた。

横浜では警察が機能しないほどのデモが勃発、機動隊を呼ぶかどうかの検討をしているほどだ。

誰もいなくなった参議院議場。残ったのは小峰内閣のメンバーだけだった。小峰、末崎、菊名、そして唐山。ずいぶん内閣のメンバーも少なくなったものだ。

「今いるメンバーのうち民政党は3人、無所属1人」

小峰は状況整理と次するべきことに考えを注いだ。

「とりあえず党本部に電話してみましよう」

ダメ元で小峰は携帯を取り出して、民政党本部に電話をかけてみることにした。まず電話自体が生きてるかも問題だ。

「……もしもし」

出た声は磯江民政党幹事長だった。

「磯江君か！」

良かった、と小峰が思った瞬間、磯江は予想外の行動に出た。

「小峰さんですか？ この党としては先ほどあなたの離党勧告が出たんですが」

それは、いつも「先生」で呼ぶ磯江ではなかった。

「ふざけるな！」

小峰は叫んだ。

「あなたの指導力の無さが、この状態を生み出したのでしょうか？」

小峰は磯江の態度が理解出来なかったが、気が付いた。

磯江は風波派だったのだ。

ならばどうすればいいか？ 答えは簡単だ。それを実行するのには少し小峰の良心が咎められた。だが、今はそう言っていられなかった。

「風波派の磯江君」

小峰らしくないその発言に、磯江は何となくドキツとした。

「今内閣は何人残っているか知っているかい？」

磯江は無言になった。

「4人だ」

小峰は続ける。

「この中に風波涼子が入っていると思うかい？」

自分で言っていて、とても残酷なのはわかっている。けれども民政党が味方に付かないことには何も始まらない。

「先生……」

磯江は涙声だった。

「わかっていますよ。きつと風波さんも生きてないんでしょう。私達が党の中の権力問題などをのんびり話している時間、小峰先生たちは大変苦勞なさっていたんでしょう。本当に申し訳ありません。でも党内は協力姿勢じゃなくて……」

磯江も磯江で苦しんでいたようだった。

「わかった。スピーチに切り替えてくれないか？」

小峰はそれを要求した。磯江は言われたとおりにした。

『民政党の諸君、小峰だ』

党本部に響き渡った声に、政権交代に思いを馳せていた党員達は皆が青ざめた。

『君達が何を考えているかは知らんが、私小峰幸三はまだ生きています。私が生きている限りは君達は黨員として総裁の命令に従う義務がある。その義務に従えない黨員の方が離党勧告を食らうべきだろう。今から言うことをよく聞きなさい』

党内が静かになる。

『内閣のメンバーはほとんど死亡した。この経緯もまた様々で、今は説明している場合じゃない。今生きているのは私以外に末崎と菊名と唐山しかない』

末崎と言ったところで、舌打ちをした黨員がいた。

『ポスト小峰などと言っている場合では無いことを各自自覚しなさい。参議院では事件処理後に改憲党との挙国一致内閣成立、民主連合との連立政権を崩壊させることを決定した。とにかく君達には地方の党委員会への通達等をしてほしい。また追って連絡をする。』

電話は切れた。磯江も崩れ落ちて泣き出した。

夜が明け、日付は15日に変わった。誰もが24時間をとてつもなく長く感じていた。まだ事件は3日目であることを思い浮かべるほど、余裕がある人間もいない。それは政治家だけでなく、一般国民までもがそうだった。

地方の党委員会から事件の詳細のFAXが総裁室にきた。首謀者は原理党代表・味、同党副代表安西、同党黨員車田らしい。地方のデモは自衛隊などにも影響を及ぼす。まずはこの議事堂を脱出するのが先決だ。

「覚えてろ、原理党」

小峰はその紙を握り締めた。

車田は新幹線で、関西に向かっていた。新幹線は空いていた。それもそのはず、誰もが家から出ようとしていないためである。今の治安はもはや最悪だ。警察が機能していない地方は店は配給所同様となっており、泥棒・殺人犯の温床だった。そのとき、車田の電話が鳴った。

「はい、車田です」

「味だ」

「どうも、味さん。今大阪向かってます」

「知っている」

味は言葉を一度切った。

「これからお前に辞令を発表する」

「え」

車田は驚いた。しかし彼の驚きをよそに味はさっさと行ってしま
う。

「車田、今を以ってお前を国家治安維持委員会委員長とする」

「いや、待ってください！」

「何だ。今時間が無い」

「尾崎さんはどうしたんですか」

味は突然黙った。そして、

「あいつはじきに、我々の正面に立ちはだかるだろう」

「それにしても」

議事堂の広い廊下を4人で用心深く歩いていた時、唐山は口を開いた。

「ひどい事件じゃの。仲間割れもひどい。事件後もまた大波乱じゃ。大物政治家黒篠健也が死んだんだ。国葬が行われるだろうし、政界も大きな変貌を遂げるだろう」

磯江を始めとする民政党議員の何人かは、経済産業省に向かっていた。

なぜなら、経済産業省だけが今原理党の党員がない省庁だからだ。そこで小峰に連絡を取り、磯江が実質経済産業省大臣として指導することになった。

本来ならば次期大臣である石島議員が来るべきだが、石島は既に自分の地元へ車で帰省していた。彼女もまた、政治家としての大切な仕事よりも自分の命が大切なのだった。

だが、彼らは油断しすぎていた。

経済産業省。磯江達はそろそろと中へ入っていった。門に立っている警備員に磯江は声をかけた。

「民政党幹事長、磯江だ。小峰総理からの命令により、ここに……」
「前総理？」

警備員のその言い回しに磯江達は嫌な印象を受けた。そして、警備員は言った。

「今の総理は味さんですよ？」

警備員の手から短い拳銃が繰り出された。発砲する構えだ。もう後戻りは出来ない。

「くそっ……いくぞ！」

磯江は中へ走りだした。他の人間もそれについて行く。列の最後尾を銃弾がなぞっていく。

階段へ向かう頃には銃弾は途切れた。

今度は尾崎の電話が鳴った。尾崎も別の車に乗って、警視庁に向かっていた。警察庁よりも実際の警察官に指示を送った方が手っ取り早いと考えたためだ。

「もしもし、尾崎です」

「味だ」

「あ、味さん、どうも。警察の方は休日の警察官を呼び出している所です」

「いやそれはいい」

「良くないでしょう」

尾崎の言葉を無視して言った。

「自衛隊の出勤を要請しろ。一般市民を抑圧する」

尾崎は驚いた。それは彼がこの事件で最も恐れていたことだった。

永田町の戦いは最終ステージへと移り始めていた。

「しかし……味さん、それはまずいでしょ」

尾崎は出来るだけ、その方向を止めようとした。だがそれは無駄だった。

「うるさい」

尾崎は困惑する。

「俺が原理党の全権を握っているんだ」

尾崎の胸が痛み出した。一般国民や、民政党の議員を殺す命令を出すなど、たやすく自分にはできない。でも味の命令は絶対だ。二つの現実には板ばさみになる。

「早くしろ。それとも……」

味の声が意地悪く響く。

「小峰の元に泣き寝入りか？ それが嫌だからお前は原理党にいるんだろう？ 自分の気持ちなんだろう？」

小峰の元に泣き寝入り？ それはない。自分は小峰の手下なんかじゃない。尾崎は真っ向から心の中で否定する。けれども言葉は口でなぞられるだけで、声として味の方には届かなかった。

「どうなんだ」

答えを迫ってくる。仕方が無い 尾崎は決断した。

「出勤させましょう」

そうだ、これでいいんだ、何も悪いことなど無い……尾崎は懸命に自分で言い聞かせた。まだ心の中で納得し切れない部分があるのは事実だったが。しかし、味の答えは予想外だった。

「いや、いい」

「え、ちよつと」

「いいんだ」

味の今の命令はなんだったのか、尾崎の頭の中に疑問が浮かんだ。

「じゃあ今のは……」

「もうお前は国家治安維持委員会委員長じゃない。車田が職を継いだ」

「え？」

尾崎は心の底から憤りが上がっていくのを感じた。プツンと何か
が切れる。

「何を言ってるんですか！私を裏切るんですか！私は味さんに

……」

「裏切ったのはお前だ！」

味は叫んだ。

「お前は原理党の党員じゃないんだよ。入ってきた時からそうだった。表面では俺の言葉に従っているが、俺の味方じゃないんだよ」

尾崎は黙った。それは間違っていないからだ。

「最後の命令だ。最後の味幹夫からの命令として聞いてほしい」

味は言った。

「小峰がいる議事堂へ向かえ。俺と勝負だ」

電話は切れた。尾崎は啞然とした。だがそうもしてられない。

尾崎は運転手に方向を国会に切り替えるように言った。

警備員から逃げ切った磯江達は、2Fのオフィスへ向かった。

「民政党の磯江だ！名を知らぬ者はいないな？今から私達が言うことに従いなさい。直に正式な新しい大臣が、」

振り返ると後ろの壁には弾痕があった。磯江の頭のすぐ横を銃弾
が通ったのだ。

磯江は前を向きなおした。官僚は皆、銃を持っていた。

「ふ……官僚までもが銃刀法を犯すとは、この世も変わったな」

磯江は笑うと、胸ポケットから銃を出した。

「磯江さん！」

隣の民政党党員が驚くのをよそに、磯江は銃を渡してきた。

議員の一人が小峰に連絡をする。

「こちら経済産業省！ 銃弾が飛び交っています！ 援軍の要請を！」

戦うと言っても、素手で戦うわけではない。尾崎としては車田より先に手を打つ必要があった。自衛隊を管轄する、旧防衛庁・現自衛隊本部へと電話をした。

「もしもし、尾崎だ」

電話に出てきたのは最も尾崎が恐れていた人間だった。

「車田です。どうも先輩」

口調は相変わらず穏やかだった。だがその声の背後から感じられるのはただならぬオーラだった。

「えーっと……」

考えてみれば車田はもう味方ではない。すると車田のほうから切り出してきた。

「スピーカに切り替えますよ」

「え？」

予想外の切り出し方だった。今の状況下では味方ではないはずなのに。しかし車田にその疑問が届いたのか、

「一応、先輩に対する敬意ですよ」

と言われた。そして尾崎は言った。

『前国家治安維持委員会委員長、民政党元厚生労働教育大臣、尾崎公太だ。この中で原理党の政治のやり方に不満がある人間、民政党の考えに賛成する人間は出勤をしてくれ。以上だ』

非常に簡潔だった。車田が締める。

「このことだ。今行きたい奴は今行け。これから原理党政府は一般市民抑圧を行う」

すると、尾崎の受話器にガタガタと席を立つ音が聞こえてきた。

「じゃあな、車田」

「では」

電話を切った尾崎だったが、今度はもう一つ連絡しなければならぬ所があった。

「国会を出た後はどうするか……」

小峰は歩きながら考えているところだった。すると電話が鳴った。
「ん」

小峰は携帯を取り出して出た。

「もしもし、小峰です」

「小峰さん」

その声は 尾崎だった。「小峰さん」という親しみを帯びた呼び方を尾崎の口から聞くのは何年ぶりだっただろう。

「尾崎！」

つい小峰は叫んでしまった。

「再会を喜ぶのは後にしましょう」

尾崎のその言葉に、小峰ははっとした。今の危機的状況をあまりの嬉しさに忘れていたからだ。

「よく話を聞いていただきたいのです」

尾崎はそれから話した。味と別れたこと、自衛隊から援軍が出ること、政府が一般市民の抑圧をしようとしていることを。

「ふむ」

小峰は全てを理解した。

「私は民政党・尾崎公太としてこの事件の解決に尽くしたいと思えます」

尾崎の決意に満ちた言葉。そう、尾崎はまだ民政党に離党届を提出していないかった。

永田町全体を巻き込んだ戦いが、国会議事堂の中と外で始まる。

永田町ゲーム

11・永田町戦争1@2016・6・15 11:47(前書き)

ご無沙汰してます。終盤はどんどん投稿していくつもりです。

尾崎は息たえだえ、永田町を走っていた。さっきまで乗っていた車から降りて。

「今、自分は民政党の人間として戦っているんだ」

その自覚を持っているために、そのまま原理党の車を使うのは尾崎の心が許さなかった。

「そういえば」

小峰が思い出したように言った。

「早く首都・政府の機能を回復させなければならぬんだ」

今年2016年は1964年以来42年ぶりの、東京夏季五輪開催年なのだ。東京都は始めに選手村候補地を押さえていたが、周辺の交通環境が渋滞過多により著しく悪い。そのため東京都は、五輪終了後も港湾開発の足場として使えると言う利点もふまえて、東京湾上に選手村や競技施設を収容した埋立地を作ることにした。2008年の北京夏季五輪が大好評だったため、日本という国のメンツをかけて最高の環境を作り上げることに国を挙げて必死となっていたのだ。

都知事の自慢げな顔を見て、思わず小峰も嬉しくなったものだ。

しかしこのようなクーデターが起こっている現在は工事はやむなく停止中だろう。

今は亡き、になってしまった黒篠も2016年の正月の党大会で小峰に、

「今年の五輪を成功させれば君の顔は国民や、国際人に知れ渡るだろう。」

今考えてみれば、これは黒篠自身の売名行為だったのかもしれないと、小峰は疑わずにいられない。たぶんそこまではいかないと思

うが。

小峰達も広い議事堂を歩き疲れていた頃だった。もちろん普通の人間が出られるような出口は封鎖されている。それぞれの党の参議院議員達は党の会議室に待機させ、小峰内閣のメンバーだけでなんとかいい出口を探そうとしていた。

「磯江君と尾崎、どっちが先に来てくれるか……」

彼らが来れば政権の奪取ができるに違いない。小峰の中では希望とも不安ともいえない気持ちがあふれていた。

だが考えてみれば磯江達は経済産業省に行っている。しかも今の経済産業省は官僚たちが武装をしていると連絡が来た。この連絡ラインも携帯の充電機次第。なんとか事がうまくいくことを小峰は望んだ。

甘かった。やはり磯江達5人が経済産業省の武装官僚全員をしかも相手の巣である経済産業省で相手にするのは、どう考えても間違っていた。形勢は明らかに磯江達が追い詰められる形となっていた。磯江達は廊下の影でエレベーターが来るのを待つ。ただのエレベーターが来ても困る。もちろん誰も官僚が乗っていないエレベーター。磯江達が生き残る方法はただ一つである。経済産業省を抜け出して都営地下鉄霞ヶ関駅に向かい、千代田線で国会議事堂前駅へ向かう……だが小峰達のことを考えると議事堂には行かない方が良さそうだと磯江は思った。自分達の身が大切だからでは無い。自分達までが捕まってしまうては、小峰を助けることにつながらないからだ。

そんなことを考えると、2台あるうちの片方のエレベーターが開いた。

磯江達は驚いた。そこに乗っていたのは……。

「あ、あれは……」

磯江は驚きの声をあげた。エレベータに乗っていたのは尾崎だったからだ。

「お、尾崎……」

幹部の一人が声を漏らした。磯江達が睨む。

尾崎は懐かしい政友だが、今は原理党の人間だから我々にとっては敵。殺される可能性だってある。

そんなことを考えている磯江達に尾崎は近づいてきた。

「……！」

磯江は震えた。まずい、殺されるか。そう思うと、行動に出ざるを得なかった。

「近寄るな！ 撃つぞ！」

ところが、尾崎の反応は磯江の予想外のものだった。

「磯江先生！」

磯江は思わず、銃を下げた。

「尾崎……」

もっと近寄りたい。だがこれも作戦かもしれない。そう思うとその距離は必然だった。

「ダメだ、今のお前は俺らの敵だ。俺ら民政党にとっては敵なんだ」

「磯江先生、お待ち下さい。今の僕はもう原理党の人間ではありません」

「なに？ 嘘をつけ！」

磯江の口から、磯江自身でも信じられない言葉が飛び出す。尾崎が泣きそうな困った顔になる。磯江もまた悲しかった。でも自分が守りたいのは小峰だ。それを考えると尾崎を疑ってしまう態勢になってしまう。

「信じてくれませんか……」

尾崎は考え込んだ。そして、

「じゃあ、今から僕がすることを見ていてください。そうすれば自然と本当のことがわかります」

尾崎は磯江達の前を通り過ぎて、階段を上がっていった。追っかけの人間が来る。磯江達はまた無言を余儀なくされた。

見ていてくれ、と言われても何が起こるか想像できない。誰か幹部を倒すのか？ それともやはり原理党の人間なのか？ 皆が疑心暗鬼の心に暮れていた。

すると、スピーカーから音が出た。マイクがオンになったのだろう。音量が大きくなり、ノイズも目立つ。そしてその声は決意を實行した。

「国家治安維持委員会委員長の尾崎だ。いまずぐ全職員は武装を解除せよ。これは国家規模の委員会からの命令である。今すぐ全職員は武装を解除せよ。状況については委員会の方で処分する。経済産業省は通常業務に戻れ。以上だ」

そう、それは尾崎の声だった。さっきまで近くを見張っていた人間が武装を解除していく。

磯江達はそつと出口へと向かっていった。1階まで階段を怪しまれないように降り、出口が視界に入り始めた時。

「尾崎は国家治安維持委員長じゃない！ あいつは寝返りだ！ 全職員武装せよ！ 尾崎と民政党を追え！」

その声を聞いた磯江達は、出口へ向けて走った。出口を出ても止めない。看板を頼りに、霞ヶ関駅までペースを下げずに逃げていった。

少数の列車が運転している都営地下鉄。とりあえず永田町駅まで向かっている途中の列車で、皆は啞然としていた。

「寝返り、ということとは……」

磯江は気の毒になった。尾崎は原理党から寝返ったのだ。なのに自分達は後輩を信頼できなかった。それに彼は上の階の放送室から

放送した。彼の方がうまく逃走できる可能性は低い。今頃殺されているかもしれない。それも自分達が裏切ったばかりに、彼が決意を態度で示したばかりに。結局自分達の醜さが目立つ、嫌な再会と逃走だった。

磯江は尾崎が命を取り留めていることを心から祈り、小峰に状況を報告するために携帯電話を開いた。

『充電してください』

小峰の携帯が息を引き取った。

「うーむ、やはりもう限界か」

小峰が困惑した顔をしていると、何やら菊名にコードを渡された。「近くの会議室のコンセントで、危険が迫るまで充電していたらどうですか」

これはこれで小峰も困った。今の小峰にとっての菊名のイメージは、立派な一大派閥風波派会長の風波を冷酷に殺した人間だからだ。だがこの危機的状況で手を差し伸べてくれるのだ。受け取らない手は無い。小峰は彼の手からそつとコードを持ち上げた。

17の常任委員会の部屋が並ぶ一角に小峰達はいた。小峰は建設委員会の部屋に入って携帯を充電した。

すると、小峰の携帯がなった。開くと磯江からだ。どうやら充電しておいたのは正解らしい。磯江の無事を祈って、電話に出た。「もしもし！」

「小峰先生！ 助かりました。今地下鉄で党本部に一度戻ってからそちらに向かいます！」

「そうか！」

すると委員会室の扉が開いた。小峰達は青ざめる。そこにいたのは銃を持った男。

「小峰内閣め！ 野放しにしたら調子に乗りやがって！ 覚悟しろ！」

永田町ゲーム

まずい、殺される。小峰はゆっくりと通話を切った。

「先生！ 先生！」

突然小峰との通話が切れた。とても嫌な予感がする。切るにしても何か言うだろう。

地下鉄は国会議事堂前駅に到着していた。党本部に戻ろうとしたら、思ったよりまずい状況のようだ。確かに自分達が行っても同じ運命になるかもしれない。でも、放ってはおけない……。

「降りるぞ」

「えっ」

他の人間が驚きを隠せないなか、磯江は地下鉄を降りた。もちろん他の者もそれに続く。

「てめーら、わかってんだろーな？ 俺ら原理党を怒らせたらどうなるかぐらいよ」

原理党過激派の人間だった。もちろん武装している。

小峰は唇を噛んだ。もちろん痛い目にあうことくらい合っている。でも原理党のしていることが合っているとは到底思えない。原理党に従うしか無いのか……

「うっ！」

いきなり男は倒れた。小峰達は啞然とする。啞然としていないのは……

菊名だった。銃を男の方に向けたまま、冷たい表情をしている。しばらくすると銃をしまって、小峰達に行った。

「逃げますよ」

菊名は委員会室を出ようとする。この男がここにいるということ……原理党の党員が一度帰ってきて、うじゃうじゃ国会にいるということだろう。案の定、音を立てて歩くことすら危険な場所とな

っていた。

生死をかけた逃走劇が始まった。小峰と末崎はまたしても複雑な気分がするが、菊名に従った。

思ったより、クーデターにも限界があった。それを今実感しているのは味である。

地方の反発は原理党が止められるものではなかった。クーデターが出来たのは、都市部に原理党員・過激派が多かったためであり、地方には原理党の人間はあまりいない。いても小選挙区当選の議員くらいで、到底1人の地元の原理党国会議員が食い止められるものでは無かった。

「国会に戻れ」

味は過激派と自衛隊にそう命令した。地方の反発は止められそうに無い。なので首相達をなんとかして拘束して地方の首根っこをつかむことにした。あわよくば殺してしまえと。

ところが味も馬鹿では無い。なにせ尾崎の微妙な心情を読み取った男だ。自分のことくらいはなおさらよく分かっているはずだ。そして自分の能力、このクーデターの限界はどこに来るのかも考えていた。

「それはそれで仕方が無い。だが……」

味は負けず嫌いだった。

「その時は勝たなくてもいい。ただ負けるのは許せない。……負け
ない」

味は携帯を取り出した。最終手段をとりあえず『始動』させておいた。

これで背水の陣が出来た。民政党にとっても、原理党にとってもである。

「こつちだぞ！」

「いねーじゃねーか！」

「くまなく探せ！」

原理党の追っかけもしつこかった。そして敏感だった。さすがク
ーデターをしてきたことだけはあつた。だが、菊名のその回避もまた
賞賛を浴びるべきものであつたと言えるだろう。

「まだ、見つかつてないみたいですね」

末崎は走りながら、菊名に話しかけた。

「そうは言つても、どこかで銃を使う羽目になるだろう。だが銃弾
も少ない」

その菊名の答えに末崎は啞然とする。

「どうするんですか！」

「それが最後だ。少なくとも小峰総理のな」

菊名はどんな敵なのかはつきりしなかつた。偽善者でも、はつき
りとした敵でも無い。彼がどういう人間なのかを小峰や末崎が理解
するにはもう少し時間が必要だつた。

磯江が逃げ去つた後の経済産業省では銃弾が飛び交つていた。

尾崎は逃げようとしたが、放送室は上の方の階にあつたため、逃
走は容易ではなかつた。

「こつちだ！」

逃げても逃げても官僚達は追ってくる。それをどれもすれすれの
所で回避しながらエレベータに辿り着いた。エレベータの扉が開く。
誰も中にはいなかった。しめた、と尾崎は思いエレベータに乗つた。
自分の体から重力が引いていくのを感じる。そしてまた重力が戻
つてくるのを感じながら、尾崎は降りた先に注意を傾けた。

「……！」

尾崎は顔をしかめた。エレベータの前は完全に官僚が配置されて
いたからだ。こうなればもう回避して逃げ切ることは不可能だろう。

残りの弾数もロクに分からない銃を使うしかない。

両者の間の凍った空気を、相手方から割ってきた。

「尾崎を殺せ！」

官僚の中でも上司に当たるように見える人間が指示した。とりあえず尾崎は走り出す。官僚達は自分達の方に急に向かってくるのに驚いていたが、そのうち彼らも発砲し始めた。弾が尾崎の肩の上をかすめる。尾崎もようやく銃を取り出して迎撃を始めた。尾崎の弾は狙った人間を次々と当て、官僚達が次々と倒れていく。最後に指示していた官僚に銃を向ける。

「ひっ！」

官僚は悲鳴にもならないおびえた声を出すと、階段で上へと上がっていった。

尾崎は軽く息をつき、官僚がいなくなったのを確認して経済産業省を出た。

「国会議事堂まで頼むぞ」

味は原理党専属の運転手にそう命令した。その運転手も状況を何も知らないわけではなかった。

「え？ 国会ですか？」

「そうだ、国会だ。国会はこの国に一つしか無いだろう？」

運転手は言葉に詰まる。味とあるう人間が直接国会に赴くのは危険だと思っただが、口から出ない。ようやく運転手も言葉に出来た。

「今の国会は危険ですよ？ 味さんが行くところでは無いのでは…」

親切心みたいなものが運転手の中にあっただが、味はそれに構わなかった。それどころか、

「そうだから行くんだ。構わず出発してくれ」

車はエンジン音を立てて、走り出した。戦場となった国会を目指して。

まだ生きている自分に、尾崎は少し驚いた。ああいう緊急事態にとっさに動く自分の体にもなく感謝をした。

息絶え絶えに運行している都営地下鉄は発車ベルが鳴るのみで、駅員がいつもする発車の際の注意喚起や、車内アナウンスすらも無い。なのでいちいち駅名標を確認する必要があった。停まった駅の駅名標は「国会議事堂前」。

「ここだな」

尾崎は発車してしまわないうちに、そそくさと地下鉄を降りた。

駅を降りると、永田町には喧噪が戻っていた。

勿論それは悪い意味で普段の喧噪とは違っていた。尾崎はそれを確認しつつも国会に向かって歩き出した。

「着きましたよ」

運転手は言いづらそうに言った。またしても味はそれに構わずに、「うむ」

と言つて車のドアを開ける。運転手は原理党専属になってから一度もわざわざ言ったことも無い言葉を、味に言った。「お気をつけて……」

自分が国家治安維持委員会委員長として車から覗いていた時の永田町の風景とは明らかに違っていた。自衛隊や過激派が永田町にまた戻ってきていたのだ。今の永田町の喧噪はそれだ。

「まったく……」

尾崎は重い足取りで国会へ向かう。すると後ろから聞きなれた、それでいて冷たい声がした。

「尾崎さん」

車田だった。

「車田……」

「感傷に浸っている余裕などありませんよ」

さっきまで自分が小峰に対して取っていた態度にまるで似ていた。それが尾崎にとっても怖かった。車田は銃を取り出して尾崎に向ける。尾崎も銃を出したが、重大なことに気がついた。

弾が無い。

尾崎は焦った。経済産業省でちょうど使い切ってしまったらしい。気持ちの悪い冷や汗が頬を落ちる。

「どうしました、尾崎さん」

車田はいつまでも発砲しない尾崎が、何故焦っているのか分かってしまったようだ。尾崎の焦りはどんどんのっていく。

「弾が無いんですかな？ それはとんだサプライズだ」

車田は笑いながら、ギリギリとトリガーに指の力を込めていった。尾崎は目を瞑る。その時。

車田は後ずさった。尾崎は目を開けて、何が起きているのかを把握しようとした。車田も何が起こったのかあまり分かっていないようだったが、おもむろに、

「誰だ！」

と叫んだ。どうやら誰かに発砲されたらしく、車田はそれを避けたようだ。

「民政党・尾崎氏の後援部隊です」

自衛隊の隊員だった。それを聞いて車田は舌打ちした。

「くそ……手間をかかせやがって。おい！」

車田は遠くの方に声をかけた。原理党側の援軍が走ってくる。そして車田は命令をした。

「この隊員と、尾崎をやつちまえ！ こいつの援軍もだ！」

さっきまでの「さん」付けの間柄はもう既に消えていた。それもまたこのゲームの掟だった。

「ここは我々にお任せ下さい。尾崎先生は国会へ急いでください」

その隊員は尾崎のほうを見て言った。この数日で見られなかった、人間の本当の優しさに満ちた笑顔だった。尾崎はホツとした気分を胸に、

「本当にありがとう」

と言って、走っていきこうとした。すると隊員は、

「お待ちください」

隊員は懐から小銃を取り出し、尾崎に差し出した。

「これから先、先生に危険が迫るでしょうから。弾が切れているの
でしよう？」

隊員は微笑むと、車田の方へ向き直った。

尾崎は受け取ると、何となく感謝の気持ちから隊員に一礼して、国会へ向かった。

国会に入ろうとした味の電話が鳴った。

「もしもし。味だ」

「どうも、味総理。秋口です」

「総理」の所の言い方に少し嫌味を持った電話の相手は、秋口貞夫だめ自衛隊統合幕僚長だった。彼はクーデターの維持のために自衛隊が使われていることをあまり良く思っていなかった。そして味もそれは知ってはいた。

「ご用件は何ですか」

余計な揉め事を起こす必要は無い。味はそう思って、単刀直入に用件だけを聞こうとした。

「車田委員長が亡くなって……」

「何！」

味は焦った。車田が死んでは自衛隊系統の命令が難しい。

「どうしますか……」

秋口のその声は、味の焦りに拍車をかけた。秋口もそのつもりだった。自分に一時的にでも指揮権が戻れば、このクーデターを失敗させることは可能だからだ。やむなくした味の決断は彼の期待を見事に裏切った。

「私が自ら指揮を執る」

尾崎が国会へ向かってすぐ、車田は尾崎側の後援部隊によって殺された。

彼の一生もまたこのクーデターに捧げられた。

国会の中では未だ小峰達が逃げ続けている。

「閣議室に戻るのが妥当だろう」

小峰はそう判断した。菊名も、
「それは私もそう思う」
と言った。閣議室へ戻る方向で逃走した。

「味だ」

味は国会議事堂の入り口にいる自衛隊員に名前を告げた。

「はっ、確かに」

自衛隊員は扉を開けた。中は小峰とのデスマッチがまだ続いており、銃をこちらに差し出してきた人間の多くが、味であることを確認すると一礼をする。

味もまた目的の場所へと向かう。

「尾崎だ。中に入れる」

尾崎は国会議事堂の入り口にいる自衛隊員に名前を告げた。

「お入れすることは出来ません」

自衛隊員は告げた。

「入れる」

尾崎はもう一度要求した。

「出来ません」

次の瞬間尾崎は小銃を隊員に放った。だが隊員の装備は銃をもつともしない。

「くっ」

尾崎が失敗を噛みしめていると、隊員も銃を取り出した。

尾崎はもう一発を、隊員に放った。銃弾は隊員の頭に突き当たり、隊員は崩れ落ちた。尾崎は構わず、中へと入っていく。

小峰達も段々と閣議室へと近づいてきた。

「ここです」

菊名が指差す突き当たりには閣議室。ドアとの距離が短く、短くなっていく。ドアノブに手をかけると、ドアは開いた。小峰は皆が入ったのを見てから、自分も入って鍵を閉めた。そして驚きの光景を目にした。

閣議室のソファアの一角に男が一人座っている。

「どうも、小峰総裁」

それは、味だった。

「味代表……」

小峰も思わず、声を漏らす。だが次の瞬間今まで込めていたものが、一気に吹き出た。

「あなたという人は何ていうことをしてくれましたか！ 内閣を壊し、国民を殺し、自分達の好き放題にして！ あなたはどんな重大なことをしてしまったか自覚しているんですか！」

小峰の憤慨に味は自然に答えた。

「自覚している。だがな、方法は乱暴だったかもしれないが小峰政権、いや民政党政府が作ってきた格差社会を是正することはできた。最初の反発は大きいけどな」

味の言葉を聞かずに、小峰は怒りをぶつけようとしていたが、格差社会という言葉聞き逃すことは出来なかった。

21世紀に入ってから頻繁に言われてきた「格差社会」という言葉。米国の農作物競争自由化などで地方部の農民は生活が立ち行かなくなっていた。地方農協も次々に統廃合されていく。日本は米国の51番目の州か、そんな声も出てきていた。小峰内閣はそれに立ち向かっていったか？ 少なくとも小峰はそれにYes・と堂々と答えることは出来なかった。

「でもな」

味は続ける。

「クーデターってのは難しい。ただ武力で占拠すればいいと思えば、違うところに歪みが生まれる。今度はその歪みを直しに行くところと別のところに……。小峰内閣を倒しても、味内閣がしっかりやっていけ

るわけではなかった。立法、司法が死んでいるからな。それに……」
味の頬を、熱い水が滴り落ちていた。

「次々と仲間が敵になるしな。お互いに、だ。これがこのゲームの怖さだ。誰も信じられない。この永田町で信じられるのは自分、たった一人だけ」

味の頭に浮かぶのは、尾崎。小峰の顔に浮かぶのは、長島や嘉条その他諸々の閣僚達。

もはや小峰にも否定する気力が無い。

「だが、味幹夫はこれで終わらない」

味はおもむろに立ち上がった。そして懐に手を入れる。閣僚達の頬を冷や汗がなでる。

「小峰幸三を殺し、小峰内閣と政府を崩壊させる」

そういつて銃を出した。小峰にも抵抗する術が無かった。菊名も銃の弾が無い。

するとその時である。唐山が何を思ったのか、味の方へと歩き出した。

「危ないです、唐山さん！」

末崎は叫んだ。だが唐山は構わずに味へと近づいていく。味もまた何もせず唐山をじっと見つめている。そして唐山は味の肩に手をポン、と乗せると言った。

「ご苦労だったな」

閣議室が沈黙に包まれた。

「……え？」

末崎が唐山の発言を確認するように、沈黙を破る。

「ご苦労？」

「そうだ」

唐山はいつもと変わらぬ調子で答えた。だがその内容は非日常的でかつ彼らしくない発言だった。

「これで終わりですか」

味は何かを知っていたようだった。何が起こっているのか全く分からない小峰達のほうを向いた唐山は口を開いた。

「まさかこんなに大きな事件になるとは思わなかったがな」

唐山は続ける。

「この話を味に持ちかけたのは半年ほど前だっただろうか。小峰の政治家としての能力や小峰内閣の強さを測るために軽い事件を起こしてみてもどうか、と持ちかけたのだ。『永田町ゲーム』という隠語の元で計画は進んでいった。だが味はどうもクーデターと勘違いしていたようだ。さすがに途中から私も腹が立ってきた。それにしてもこの内閣の結束力はひどかったな。政治というのはこういうものなのか」

小峰の気持ちは複雑だ。馬鹿にされているような気もするが、本来ただのクーデターであったこの事件で、予想外に死者が出てしまったのは小峰の責任だ。

「だがこれで終わりにしたらどうだ？」

唐山は味をなだめるように言った。だが味は応じない。

「私は最後まで戦うつもりです」

「好きにしる。もう原理党は原理党で限界だろう」

「原理党は限界でも私はまだ大丈夫です」

味の決意は大きなものだった。そして銃口を小峰に向ける。

尾崎は閣議室へとずんずん向かっていく。途中にいた原理党の間も圧倒されたのか攻撃してこなかった。

最後の廊下まで来た。突き当たりの閣議室の扉は開いていた。嫌な予感がする。尾崎は一步一步進んでいく。扉の前まで来ると中には味がいるが見える。味が持っているのは銃。そしてその銃の先には小峰。尾崎の背筋を冷たいものが通る。

「やめろ！」

尾崎は叫んで、銃のトリガーを引いた。

味は驚きのあまり銃を落とした。そして体を大きな衝撃が走る。体がふらつく。

「尾崎か！」

銃弾は味の腹を直撃していた。当たり所が悪かった。彼の命はそう長くは持たない。

「小峰さん、早く逃げてください！ 他の方も！」

尾崎は避難させようとした。味が尾崎の肩をつかんだ。

「待て。小峰に言わなければならぬことがある！」

味は必死そうな顔をしたが、尾崎は相手にしなかった。

「早く逃げてください！」

「待てと言っているだろう！」

味は執拗に話を聞くことを要求してきた。そして、

「永田町に爆弾を埋めてある！」

唐山以外の人間が味の方を振り向いた。そして唐山が叫ぶ。

「何故それをした！」

「爆弾？」

小峰は思わず笑い出しそうになった。笑うしか小峰の側に選択肢は残されていないか。

「そつだ。爆弾だ」

味は堂々と続ける。

「最終手段を発動したまでだ。どうせ死を迎えるならば名を残して死にたいとな。小峰！ 内閣の崩壊を食い止められなかったことはお前の傷になっているだろう。だが政治家なら政治家らしくあっさり諦めたらどうだ！」

味のその言葉に小峰の怒りがぶり返す。

「なんだと！」

「言い返したかったら、皆を避難させてみる！ 諦めないできちんと自分の信念を貫いてみる！ 規模は東京都が全て破壊される程度だ。味内閣も総辞職する。よってお前らに実権が戻る。首都機能の移転、国民の安全の確保を24時間以内に行ってみる！ それも出来なかつたらお前に首相の座にいる資格は無い！」

小峰はもう言い返さなかった。

「行きましよう」

14・こ苦勞だったな@2016・6・15 12:40(後書き)

次回最終回、次々回エピソードになると思います。長さによっては最終回を二分するかもしれません。

息もたえだえの味は、携帯電話をやつとのもので取り出し、原理党本部へかけた。

党の幹部が電話に出た。幹部の声もろくに聞かずに用件を伝えた。「銃撃を受けた。もう先は長くは無いだろう。よってここに味内閣の総辞職を表明する。衆議院議長に伝えて来い。以上だ」
通話を切ると安心したのか、味は眠りについた。

小峰達は国会をまず出て、党本部へ向かうことにした。さっきまでいた過激派はいなかった。代わりに、国会を出たところに自衛隊が集合していた。隊員の一人が小峰のところへ来る。

「小峰総理、出勤を要請しています」

もう味内閣は総辞職をしたようだ。それを悟った小峰は命令を下した。

「現在をもって東京都に非常事態宣言を発令する！ 東京都民に避難の準備を呼びかけてくれ。避難先は出来るだけ早く政府の方で指定する」

車も無いので、小峰達は地下鉄で民政党本部へ向かう羽目になった。国会へ向かっている途中だった磯江達にも電話をして党本部へ向かわせた。大事な話があるが、この段階では話さなかった。混乱させるのも良くないからだ。

閣僚の大部分が死亡した今、内閣総理大臣の小峰と官房長官である末崎が任務をつとめるしかない。まずはテレビ局や電話局など情報網を復活させた。電気屋のテレビでも構わないので東京都の非常事態宣言を知らせることが望ましい。

復活したばかりの多くの放送局は早くもニュース速報を流している。

『東京都に非常事態宣言 23時間後に東京都壊滅か』

『クーデター最終段階 東京都非常事態宣言』

『3日内閣”総辞職 小峰氏の対応に注目 首都移転先予想』

民政党本部には多くの議員が既に小峰達の帰りを待っていた。磯江達もいる。会議室の机に置かれていたのは大きな首都圏の地図。小峰は着いたばかりにも関わらず、呼びかけた。

「首都の移転先を決めるぞ。インターネットなどを駆使して、東京都から最短でかつ比較的都市としての機能が高い場所を選ぶぞ」
皆がうなずいた。そう、小峰が打ち出したのは遷都という方法だった。

千葉県木更津市。3時間の協議の末、新首都はここに決まった。他の候補としては横浜市やさいたま市が考えられたが、爆発の規模がいまひとつ分からないので隣接している県は危険として除外された。千葉県は東京都と海を挟んでいるので好都合であったうえ、その中でも木更津市は東京都のすぐ南に位置する川崎市とアクアラインでつながっており、移転が迅速にできると考えられたためだ。

「よし」

小峰の顔には政治家としてのやる気が久々にみなぎっていた。

「自衛隊を使って、都民を木更津に送り込むぞ。木更津へ移動後、各市町村へ公民館の使用を連絡する」

都民の人口を千葉県の公共施設全体で裁ききれられるかも大きな課題だ。

『新首都は木更津に決定 早めに避難を』

各局は新首都を取り上げている一方、東京都が爆発するという事実を受け入れている部分もあり、早いところでは本社を閉鎖して千葉県系列局に切り替えていた。

「磯江、都民の避難状況はどうだ」

「地方消防によると少なくとも23区住民は広域避難場所に集まっております、いつでも移動に入れる態勢になっているようです」

磯江がはきはきとした声で答えた。

「よし、まずは我々から千葉に渡って木更津の市長とも緊急会談をしなければ」

「お車の準備の方、出来ています！」

別の秘書が気を利かせていたようだ。「ご苦労、と声をかけると小峰は皆を引き連れて外に出た。

小峰は車に乗る直前、振り返ってぼんやりと見つめた。もう帰って来ることは二度と無かろう。民政党本部を、である。

車は首都高、東名高速を経て川崎へ向かう。ごたごたしていた車内も首都高に入る頃には落ち着き始めていた。

小峰が乗る車は秘書が運転しており前方助手席に菊名が、後方には小峰を中心に末崎と唐山が乗っている。

落ち着きを取り戻した車内で小峰は、永田町ゲームの首謀者であるらしい唐山の顔を改めて見つめた。無所属だから政治と関係無い人だと、内閣発足時から小峰は思っていた。誰が本当に誰が嘘なのだろう。本当は皆どこに属しているのだろう。小峰がそんなことを思っているうちに、車は誰もいない料金所を通過してゆく……。

「懐かしい……」

菜々子は地元の中学校の校舎を見上げて言った。

菜々子は別に暇潰しでも同窓会でもなく中学校に来ていた。来た理由は広域避難場所だから、である。中では自衛隊の隊員が場所割りをしているようだ。保険証を持った菜々子は自衛隊員の元に駆け寄って、

「小峰です」

と言った。住所を見て自衛隊員は菜々子がこの地域の住民であることを確認して、所定の場所へ案内した。

「じきに千葉県への避難勧告が出ますからね」

自衛隊員の言葉を聞いて菜々子は驚く。

「千葉県？ なぜそんなところに……」

「え？ むしろ知らないんですか。木更津に遷都をするって」

自衛隊員に逆に驚かれた。菜々子は父の顔を思い浮かべながら言う。

「よほどのことが？」

「どうも爆弾がどうたらとか……ガキのSF小説でも今時そんな話無いですよ」

その自衛隊員もまた疲れているようだった。

場所はまた移って改憲党本部。綾葉達もまた避難に備え始めていた。そんな時である。

「君達に重要な話があるんだ」

味内閣が無責任に総辞職した今、小峰が奮闘している。24時間以内に首都を移転させるという、都民の全生命を背負った行動に出ていることも綾葉は知っている。

「なんですか」 この非常事態で言うことだ。改憲党の議員達も覚悟はしていた。

「実は改憲党を解散したいと考えているんだ」

綾葉の言葉のあとに長い沈黙が続く。

「今の小峰首相に逆らう必要は無いだろう。民政党に戻っても構わないと思うし、小峰首相なら大丈夫だ」

突然の解散宣言に皆動揺した。だがその固い決意は他の議員にも伝わってきたようで、

「じゃあそうしましょう」

と綾葉に賛同した。派閥など関係無かった。皆が小峰に期待を抱いているのだ。

小峰が乗る車もそろそろ東名にさしかけた。携帯が鳴る。

「もしもし」

「綾葉です」

「あ、これはどうも。そちらもぼちぼち避難を？」

「ええ。車であなた達に続く形になっていますよ。ちょっとお話がありました」

小峰なりに話の内容を察しようとした。

「あの……今は次期政権の話は……」

「控えて下さいませんか」と続くはずだった。しかし小峰の予想は外れた。

「それどころか全く正反対だ」

「え？」

「我々改憲党の全議員は政府機能が回復し次第、民政党に復党したいと思う。事実上、旧体制に戻りたいということだ」

綾葉の言葉に小峰は驚いた。黒篠内閣時代の集団離党組の代表である綾葉が、民政党に復党するというのは大ニュースになるほどの事件だからだ。綾葉は続ける。

「あなたの政治スタンスはこれといった改革はしない代わりに、政治をできる限り綺麗なものにしようと努力しているのが垣間見える。そんなあなたと張り合っていることに意味は無いし、また黒篠元首

相が死んだ今では民政党と争う必要も無い」

言葉の一つ一つが、小峰の心に染み渡っていく。

「綾葉さん、わかりました」

「だが、条件がある」

小峰の承諾に、綾葉は待ったをかけた。

「復党は、あなたがきちんと首都機能の移転と国民の安全の確保がきちんと出来てからだ」

「もちろんです」

小峰はしっかりと、答えた。

携帯を切ると、小峰の車は川崎ICの近くまで来ていた。とその時である。胸を押さえて唐山がうめき出した。

「……うっ！」

「どうしました！」

小峰が唐山の方に体を向ける。

「……心筋梗塞だ。持病が、悪化したのじゃよ」

「なんですって」

末崎が驚きの色を表した後、運転している秘書に向かって言った。

「そのICで降りて、どこかの病院へ向かってくれ！」

「いい！」

唐山が断りを入れた。

「わ、私に、構わず進め！」

「何を言いますか！ このままでは、」

「無駄だ。木更津へ向かった方が良い」

小峰が説得に走ろうと菊名が止めた。

「菊名さん！」

末崎が怒鳴る。ところが唐山は相変わらずの態度だ。

「私は構わない。これが……」

唐山の意識が遠のいていく。

「これが、私の永田町ゲームのゴールだ」

また一人、閣僚が減った。しかも目の前で。

「……くそっ！」

小峰は目の前が真っ暗になったように感じた。自分の横にいるのは、死人。そんな状況で国民の安全うんぬんを考えなければならぬという自分の立場。小峰は初めて政治を本当に嫌だと思った。

「もうだめだ」

小峰の顔が青ざめていく。末崎もかける言葉が見つからない。

そんな小峰の頭に衝撃が走った。何が起こったのか小峰には分からなかった。分かったのは次の瞬間、助手席に座っている菊名が拳の形に手を握り締めて自分を見つめていることだった。

「あんたいい加減にしるよ！ 官房長官や幹事長や、果ては綾葉代表があんたをバックアップしようとなをあげているのに、あんたは何だ！ そんな生半可な気持ちで総理になったのか！ 国民全員の悲しみを負ってでも、自分の体を捧げて政策を行うのが首相の仕事だろうが！」

菊名の言葉が小峰を揺るがす。けれどもそう簡単に小峰も動き出せなかった。

車はアクアラインへと入っていく。

「……とりあえず私が代行で政務を行ってきます」

木更津市役所に着いた車を降りることが出来ない小峰に、末崎はそう声をかけた。末崎は別の秘書に唐山の遺体の処理を命じた。

菊名も車を降りた。

「まったく、この首相は本当にダメな奴だな。どんな悲しみがあるうと時間が押し迫っている今は国民の安全を確保するのが先決だろう」

「そんなにきつく、言わないで下さい」

時間は確かに押し迫っていた。時刻は15:00、爆発まであと21時間。末崎はあくまでもフォローしている。

「あの方はあの方の悲しみがきつとあるんです。今はそつとしてあげましょう。絶対あの人ならすぐ立ち直って私達を引っ張ってください」

「あんな男に引っ張ってもらった覚えは無い」

「そうは言っても」

末崎は少し意地悪そうな笑みを浮かべる。

「ここまで律儀に、総理について行っているではありませんか」

菊名は否定しなかった。あれほどまでに乱暴な口ぶりが止まった。

「とりあえず市長と話をしましょう。今は菊名さんも大事な人材です」

「これはこれは」

市役所に入ると、木更津市長・安城啓太あんじょうけいたが出迎えに来た。

「お話聞いております。避難受け入れ、準備は整っていますよ」

「準備がお早いですね。恐れ入ります」

末崎は深く頭を下げた。後ろにいた菊名も軽く下げた。

「被害の規模も規模なので、東京都の被害状況によっては政府機能を木更津市に移転する可能性が高いです。本来なら県庁所在地で地方都市である、千葉市にするのが妥当かもしれませんが、千葉と木更津の位置関係も位置関係なもので、ですのでその際もよろしくお願いいたします」

末崎はざつと用件を述べた。

「お任せ下さい」

安城も引き受けてくれた。すべきことの第一段階は終えた。末崎は近くの秘書に言った。

「自衛隊による東京都民の避難を開始するように！ 自衛隊の方では地域によって順番を割り振り、本日付中には避難が無事に終わられるように手配するように言ってくれ。千葉に入った後の手はずはこちらで整える」

秘書は用件を了解すると、外へ走って出て行った。菊名はそれを眺めていた。末崎は言うことを言い終えて、ほっとした。すると安城が声をかけた。

「末崎官房長官、お疲れ様です。ところで総理は？」

当然の質問が来た。末崎は菊名のほうを見た。数秒経つと末崎は安城の方に向き直り、答えた。

「総理は、連続の政務で疲労がたまっているようですよ」

「なるほど……それは大変でしたことでしょう。なんでもクーデターが起こったとか」

「はい。おっしゃる通りで」

「総理はいつごろ、ご復帰で？」

「はつきりとは分かりませんが、総理はこれぞという時に必ず指示をきちんと出してくれるはずですよ。内閣一同が彼を信頼しています」

内閣一同、の所で末崎の心が少し痛んだ。菊名もその部分で苦い顔をした。

では頑張ってください、の言葉の後を受けて末崎達は車へと戻った。これで終わりではない。避難終了後の首都の一時的な移転先として千葉県全体に影響を与えることも含めて、千葉県に挨拶に行かなければならないのだ。

「総理」

末崎は優しく声をかけた。小峰がゆっくりと顔を上げる。

「都民の避難を開始しましたよ。総理は爆発後の政府機能の回復に努めてください」

「もう嫌だ」

小峰は悲しそうな顔をして、また顔を伏せてしまった。

「あんたの娘さん、教師を目指しているそうじゃないか」

菊名の突然の言葉に小峰の体がビクツと震える。ここ何日か多忙で忘れていた一人娘、菜々子のことを思い出したのだ。菊名が知っているのは、何かの機会以小峰が菜々子の話をしたからだろう。政務が忙しい時でも菜々子のことを思い出さない日は無かった。だがここ数日間は精神的にもダメージが大きく、菜々子のことなどどこからも出てこなかったのだ。小峰の心の中に暖かいものが広がる。

「菜々子……」

「人を教える立場になる娘さんに、父親として立派なところを見せつけてみたらどうなんです。自分のしている仕事は汚い仕事では決して無い、それどころかどんな仕事よりも重い責任を負う分、どんな仕事よりも素晴らしいものだということ。あなたは政治に誇りが持てない政治家ではないでしょう。少なくともそうでないあなたに付いて来た覚えは無い」

冷たい口調だったが、小峰の心の中に今まで以上に響かせた言葉だった。

「政治はゲームなんかじゃない」

小峰は顔を上げて強い声で言った。

「この手に日本を取り戻してみせる」

「なら私はあんたを応援するまでだ」

菊名は助手席ではなく、今度は小峰の右に座った。一人乗客が減ったからである。そんなことにめそめそしていられる時間はもう過ぎた。そう自分に言い聞かせて、小峰は言った。

「千葉県庁に向かうぞ」

「かしこまりました」

運転手はキーを挿した。末崎は一人の様子を見守り終わると、車に急いで乗った。

『都民 千葉県へ避難開始』

テレビのテロップがこのように変わってきたころ、菜々子のいた中学校の体育館にも放送が入った。

「避難の準備が整いました。この地域は18時頃に避難を開始します。ここに来た際に受け取った整理番号を元に、所定の番号の車に乗ってください」

この放送を聞いて、菜々子もとりあえず安心した。

「お母さん、大丈夫かな。そして何より……」

電話越しで笑っていることが容易に想像できる、いつもの小峰の声が菜々子の頭の中を反芻する。

時刻は17:30を指していた。小峰達は千葉県庁への挨拶も終わった。とりあえず皆千葉県庁に特別対策本部を設置してもらい、対策本部で今日は寝泊りすることにした。磯江達ともようやく合流する。電話なども置いてもらい、いつ何が起ころうとも大丈夫なようにだ。

そして待つてましたとばかりに、電話がかかってきた。

「もしもし」

「総理ですか！ これはどうも！ ちょっと困ったことがありますし

て！」

「どうしました」

「アクアラインの渋滞がひどいです！」

心配はしていたが、実際にもう起こってしまった。小峰も困惑する。

すると横にいた末崎がノートパソコンを広げた。手早く地図サイトを開く。

「総理、東京湾岸道路をまずは使うことにしましょう。一般都民には知らせず、なるべく国関係だけで」

末崎は答えを早々と出した。

「なるほど」

「それから身分証の提示を義務付けましょう。都在住でないものは通行禁止としましょう。少々手荒ですが仕方ありません」

「わかった」

小峰は電話に戻った。

「とりあえず回避路として東京湾岸道路を使ってくれ。それと公団を通じて身分証の提示を義務化、都在住でない者は通行禁止を利用者に通告するように言っておいてくれ」

「かしこまりました。こちらでも善処します」

電話を切った。すると他方から電話の呼び出し音が。これは大変な夜になりそうだ。磯江は心配そうに小峰の顔を見た。それからも皆はずっと対応にあたった。

その心配は当たった。

「ん」

小峰は起きた。というより寝ていたことにも気がつかなかった。

窓からは日が差している。つまり朝だ。上から小峰の顔をのぞいている磯江は安心した顔をしている。我に返った小峰は飛び起きる。

「東京はどうした！」

「大丈夫です。確認できる範囲内での全都民の避難が無事終了しました。いろいろと問題も多々ありましたが」

磯江が答える。

「何故私は寝ている！ こんな重要な時に！」

「倒れたんですよ。連日の激務が祟ったんでしょう」

「君達も疲れているだろうに、すまない……」

「構いません。万事何とかうまくいきました」

時計を見た。時計は12時近い。

その時、地面が揺れた。地震と言うよりは地響きに近いものだった。日が差していた窓がますます明るくなる。

こうして、永田町は姿を消した。

o v e r ・それから@future (前書き)

最終回です。今までこの作品を見届けてくださった皆様、ありがとうございます。

連載完結につき、登場人物の回のネタバレ部分を消しました。

それでは最終回をお楽しみ下さい。

o v e r ・それから@f u t u r e

「まもなく3番線 列車が参ります ご注意下さい」

電車のアナウンスとともに、轟音が近づいてくる駅。そして開いた扉に、これでもかというほど人が詰め込まれていく通勤ラッシュ。2016年9月1日は普段どおりの朝を迎えることが出来た。

首都が木更津市であることを除けば、である。

「千葉新聞、1枚」

「100円です。あ、どうも」

そして通勤駅ではキオスクに並んでいる朝刊が次々と消えていく。その日の各紙の一面を飾っていたのは、

『第二次小峰内閣発足 側近のみで固めた強力地盤政権』

6月16日。あの忌まわしいクーデターの全てのプログラムがわかりを告げた日は終わったが、それから1〜2ヶ月は事実上政府機能 が止まっていた。国会が無いためである。そこで小峰首相は国会を木更津市に再建することとした。各省庁も次々と一時的な庁舎を作っている。

「将来的にはまた永田町に戻ってこられるようにしたい」

というのが小峰の意思だった。これが本人の心からの意思かどうかは分からない。あの永田町に小峰は本当に帰ってきたいと思っているのだろうか。

永田町ゲーム

そして8月31日、臨時国会が開会した。そして今日9月1日はニュースの山となってしまった。

臨時国会開会、改憲党が民政党へ復党、そして小峰の再任。

8月31日。国会衆議院議場。

「どうも小峰さん」

綾葉が小峰に声をかけてきた。

「どうも」

「とりあえず政府見解は挙国一致内閣にすると」

「まあ、そのつもりですが改憲党が復党する今となつては必要無いかもしれません」

「総理自身の進退は？」

小峰は少し考えたような顔をした。そして、

「それは皆さんに任せます。場合によっては末崎君や菊名君がなくても構わないかと」

まずは小峰総理の事件の実情説明からだつた。

振り返れば長い話である。13日、原理想味議員により閣議室に内閣メンバーが閉じ込められる。次々と閣僚達が脱走、射殺される。14日、味内閣成立。閣議室から事実上解放され、参議院特別集會を開く。15日、味内閣総辞職。自衛隊による国会占拠。そして東京都に非常事態宣言、都民全員が避難。16日、終結。それをあの頃の自分に戻つたような感覚を味わいながら、説明した。そしてこのような事態が起こつたのは内閣の責任であると謝罪した。

そして首相指名である。

結果は衆参ともに小峰が圧倒的大勝だつた。首都崩壊後の処理も小峰内閣は担当することとなつたのだ。

「これは……」

小峰は第102代首相としての演説台に立つた。予想していなかつたことだ。

「とりあえず、信任してください。皆様、ありがとうございます。新首相としてこれからの首都・政府機能の回復、事件の再発防止対策に努めてまいります。しかしあいにく自分が組閣することは想定外だったため、これより閣議室に戻って、人事を決めてゆきたいと思えます。よろしくお願ひします」

すると綾葉が挙手した。

「綾葉豊一君」

議長が指名する。小峰が演説台から降り、代わりに綾葉が立った。「我々改憲党は小峰首相を全力で応援していきたいと思う。それにあたって本日付で改憲党は民政党に復党する」

驚きの声が上がった。

「小峰総理に拍手！」

議場が拍手の音に包まれた。

あれから味は救急車で運ばれ、何とか一命を取り留めた。病状が回復し次第、裁判にかけられる見通しだ。既に安西副代表は起訴されている。

小峰も一回、見舞いに向かった。その時、味は一つ頼みをした。

「総理、是非私の名前を内閣総理大臣一覧に入れてくれませんか。たった2日の内閣、クーデター内閣、名前だけ内閣、何とでも言うていい、でもそれだけしてほしい。せめてもの願いだ」

そんな願い、聞き入れるもんか　などと小峰も当然に思ったが、そのうち味を可哀想に思えてきてしまった。性格が災いしたとしか言いようが無い。

またその後、小峰の娘・菜々子は4月を持って私立高校の政経の教員になった。

「それでは内閣について説明します。資料集の……25ページを開

いてください」

資料集を開いた。その歴代内閣一覧を見て、菜々子は複雑になった。

『101代 味幹夫内閣 2016年6月14日～2016年6月15日

在任日数最短の内閣。永田町ゲーム事件（P・27）の最中に発足。小峰内閣在任期間中とする説もある。』

「クーデター事件は今までにほとんどありません。『二・二六事件』、『五・一五事件』、そして『永田町ゲーム事件』。この永田町ゲーム事件は、首謀者が計画段階で『永田町ゲーム』と呼んでいたことが名前の由来ですが、単純に『六・一三事件』と呼ばれることも……」

「綾葉さん」

議事終了後、小峰は閣議室へ向かう途中で声をかけた。

「本当に私が首相でよかったのでしょうか」

「あなたしかいまい。それにこの事件が起こった原因を自分だと認めるなら、これからの処理も責任を持って行うのが筋というものでしょう」

「そうですね」

やる気に満ちていた。

「政治はゲームなんかじゃない、いつかそう言ったそうじゃありませんか」

綾葉の顔が意地悪な笑いを浮かべている。小峰も思わず笑ってしまふ。

「ええ、たしかに」

「あんな酷いゲーム二度と起こさないよう、頑張っていきましょう。ゲームだとしてももっと幸せに満ちたゴールが待っているゲームに」
「ええ」

閣議室に入ると末崎、そして尾崎が既に待っていた。

「総理、再任おめでとうございます」

末崎のその言葉に、小峰は微笑を返す。そして、

「総理、戻って参りました」

尾崎がその言葉を言うと、小峰は尾崎と抱き合った。尾崎の目から涙が出る。小峰は涙をこらえながら、そして笑顔で、

「よし！ それでは新人事を決めるぞ！」

over・それから@future（後書き）

ご読了ありがとうございました。

またしても滅茶苦茶なオチですが、

「永田町ゲーム」

中編第2弾、完結しました。

皆さんからするとどうか分かりませんが、今までの中で一番楽しく執筆することができました。また連載中の励ましのお言葉ありがとうございました。ありがとうございました。

ご読了された方は、ご意見・ご感想を是非お願いします。まだまだ未熟な作者はアドバイスが必要です。一言、二言、三言で結構ですのでどうかお願い致します。

それではまたの機会に。佐乃海テルでした。

お知らせ

「永田町ゲーム」をお読みの皆さん、こんにちは。流水です。

この作品は今までの人生の中で一番書いていて楽しかったというか、自分が力を入れやすかった作品でした。この作品を好きだ、と言ってくれた方には大きな感謝をしますが、自分もこの未熟な物語が好きです。

ですが、この作品が好きだからこそ今までの作品に無かったことをしてみたいなと思います。

それが、原稿の再構成？みたいなものです。連載完結後にもメッセージをいただきましたが、やはり自分でも思うような未熟さがあります。書く前の設定の組み立てがやはり不十分なのです。今のこの時点で書いた、この作品を僕は大切にしたいです。ですがそれと同時にこの物語をもっと綺麗な作品にしたいな、とも思うのです。

そのため、誠に勝手ではございますが修正をかけていきたいと思っています。読者の方がいらっしやるかどうかは分かりませんが、いらっしやった場合にはご迷惑をおかけします。修正に関しては、次の点に留意したいと思います。

・登場人物やストーリーは変わりません。変わるのは無かった設定が付け加えられたり、今までであった設定が矛盾を無くすために無くなったたりするところです。設定といっても細かい部分のみで、小峰の名前が変わったり末崎が民主連合の代表になったりすることはありません。

・また章の区切りや数も基本的には変えない方向です。文字数が多くなりすぎるような修正が多数出た場合は、改訂版と名づけて別作品にする方向にします。おそらくありませんが。

・ストーリーの場所が前後するかもしれません。

このような変更が気になる！という方がいらっしやれば構いませんが、そのような方のため、また自分の中での修正の記録として以下に修正の履歴を残します。

何度も申しますが、ラストやストーリー展開には決して手を加えません。ですので再評価等は必要ございません。よろしくお願いいたします。

(佐乃海テル)

==== 修正履歴 ====

2006・10・11：修正のお知らせ、掲載

2006・10・19：PN改名につき、後書きを修正。

2006・10・28：ルビ機能実装につき、人物紹介のレイアウトを修正。

2006・11・6：「16・木更津遷都」のセリフの説明を修正。
菊名の発言であることがはっきりと分かるようにしました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9007a/>

永田町ゲーム

2009年6月15日21時59分発行